紀も終に近づくに從つてアメリカ印度人の『自然的』生活の感傷的歎美はルーソーが火をつけたために焔となつて燃え、遂にこの歎美は經濟學に影響し始めた。久しからずして彼等はフィジオクラット卽ち自然の制規の信奉者と呼ばるゝに至つた。

この名稱は一七六八年に出版されたデュポン・ド・ヌムールの『フィジオクラティー』Dupont de Nemours, Physiocratie ou Constitution Naturelle du Gouvernement le plus avantageux au Genre Humain の書名から來てゐる。なほ農業と田園生活の自然性・單純性とに對する彼等の熱情は一部分彼等のストア派先輩から來てゐることを一言しておきたい。

彼等は廣大な行動原理としての自由貿易說を主張する最初の人々であつた。この點に於てはダドリー・ノース卿 Sir Dudley North の如き進んだ英吉利學者にさへも先んじてゐた。

彼等は經濟學にその近

政治問題・社會問題の彼等の取扱方の音調と氣質とには後の時代を豫言する點が多かつた。さりながら彼等は思想の混同に陷つた。この混同は當時の科學者間にさへ通有であつたが、長い間の奮鬪を經て漸く物理的科學からは除かれたものである。彼等は倫理的原理と因果法則とを混同した。自然に合致すべしとの倫理的原理は命令法で言ひ表されたものであり、何等かの行動法則を指定する。因果法則は科學が自然に質して發見するものであり、直接法で言ひ表される。右その他の理由によつて彼等の業績は殆んど直接の價値を持つてをらぬ。

併しその經濟學の現狀に及ぼした間接影響は非常に大であつた。蓋し第一に彼等はその議論の克明と論理の一貫とをもつて後の思想に大影響を及ぼしたからである。又第二に彼等の研究の主要動機は、その先行者の多くの場合とは違つて、商人の富を增し國王の財庫を滿すことにあつたのではない。その主要動機は極度の貧乏によつて生じた困苦と墮落とを輕減せんことにあつた。卽ち彼等は經濟學に對して、人間生活の品位を高める助けとなる知識を求めるといふ近代的目標を與へたのである(5)。

代博愛的音調を與へた

(5) 富容のヴォバン Vauban (一七一七年に執筆)さへも、人民の福祉に興味を持つことを辯解せねばならず、人民を富ましめるは國王を富ましめる唯一の途であると論じた『民貧しくば國貧しく、國貧しくば王貧し』。Pauvres paysans, pauvre Royaume, pauvre Roi. 他方に於てアダム・スミスに大影響を與へたロックはフィジオクラットの特異な經濟意見の若干に先鞭をつけた如く、彼等の熱烈な博愛にも先鞭をつけた。彼等の愛用句『爲さしめよ行かしめよ』Laissez faire, laissez aller は今は通常誤用されてゐる。『爲さしめよ』とは、何人も自己の欲する物を自己の欲する如く作るを許すべく、一切交易は一切人に開放さるべく、政府はコルベア主義者が主張した如く工業家にその衣服の體裁を指定すべきでないとの意味である。『行かしめよ』Laissez aller (或は passez) とは、人と財とは一の場所へ、殊に佛國の一地方から他地方へ自由に移行するを許すべく、交通稅・租稅及び煩雜な制規に服することなしとの意味である。なほ『行かしめよ』は中世に於て將軍が武藝試合の鬪士から革紐を解き放つ時に用ひた合圖であ

ることを附言したい。

三

アダム・スミスの天才

その次の前進上の大きな歩み、經濟學上未曾有の最大の歩みは一學派の業績に非ずして一個人の業績であつた。アダム・スミスは元より彼の時代の唯一の英吉利大經濟學者ではなかつた。彼が著述を出す直ぐ前に、ヒューム Hume とステュアート Steuart とは經濟理論に重大なものを加へ、アンダーソン Anderson とヤング Young とは經濟事實の優秀な研究を出した。併しアダム・スミスの廣濶性はその一切の同時代者—佛國及び英蘭の—に於ける最善のものを悉く包容するに十分であつた。尤も彼は疑もなく他の諸學者から多くのものを借用したが、なほ且つ彼をその先行者及びその以後の者と比較すればする程、彼の天才は愈々輝き彼の知識は愈々廣く彼の判斷は愈々不偏に見える。

彼は永く佛國に住みフィジオクラットと親しく談論を交へた。彼は當時の英吉利哲學・佛國哲學を細心に研究した。彼は廣い旅行と蘇格蘭實業家との親密な交際とによつて實際的に世界を知るに至つた。これらの長所に加へて、彼は無類の觀察力・判斷力・推理力を持つてゐた。その結果、彼がその先行者と意見を異にする場合には、必ず彼の方が先行者よりも正しい方に近い。他方今日知られてゐる如何なる眞理と雖も彼が全然認めなかつたといふものは殆んどない。そして彼は富の一切主要社會面について論著を出した最初の人であつたから、この理由に基いて彼のみが近代經濟學建設者と認めらるべきであるかも知れぬ(6)。

(6) アダム・スミス上位論についてはワーグナーの『原論』中の簡單ではあるが重味ある叙述を參照(Wagner, Grundlegung, Ed. 3, pp. 6, et.)。なほハスバッハ『アダム・スミス研究』Hasbach, Untersuchungen über Adam Smith (英吉利思想・佛國思想に對する和蘭思想の影響を說いてゐるのは殊に興味がある)、及びプライスの論文L. L. Price, Adam Smith and his relations to Recent Economics, Economic Journal, Vol. III. 參照。　カニンガム(Cunningham, History, § 706)は激しく論じて言ふ、『彼の偉業は、從前の著述家が國民富を意識的に國民權力に從屬せしめて取扱つたに對し、國民富の概念を遊離した所にある』と。併しこの對照の各々の半面は恐らく餘りに鋭い輪廓で畫かれてゐる。キアナン Cannan は『アダム・スミスの講義』Lectures of Adam Smith の序言中にハチソン Hutcheson の彼に及ぼした影響の重要性を示してゐる

併し彼が開拓した地域は一個の人間が徹底的に測量すべく餘りに廣大であつた。彼が或る時に於て探り當てた多くの眞理は他の時に於ては彼の視野から脫して了つてゐる。從つて幾多の誤謬を支持するために彼の權威を引照することも可能である。尤も檢討して見れば、彼が眞理に向ふ道を進みつゝあつたことは常に分るのである(7)。

彼は自由貿易說を著しく開展した

(7) 例へば彼は彼の時代に行はれてゐた混同、即ち經濟科學の法則と自然に合致すべしとの倫理的指令との混同を必ずしも全然排除してゐなかつた。彼に於ける『自然的』は時には、現存諸力が現實に作り出し或は作り出す傾あるものを意味し、時には彼自身の人間的性質から言つて作り出すべしと希望するものを意味した。同樣に彼は時には一科學の細說をもつて經濟學者の本領となし、時には統治技術の一部を提げて立つをその本領とした。併し彼の言葉は往々散漫であるとは言へ、仔細に研究して見ると、彼自身問題の眞相を略ぼ熟知してゐたことが分る。彼は因果法則、即ち近代の用法の意味に於ける自然の法則を求めつゝある場合には科學的方法を用ひてゐる。彼が實際的指令を言ふ場合には、恰かもその見解のために自然の權威を借りるかの觀ある場合にも、單に如何にあるべきかについて私見を言ひ表しつゝあることを一般に知つてゐる。

彼はフィジオクラットの自由貿易說を非常な實際的思慮と企業の現實狀態に關する非常な知識とをもつて開展し、ためにこの說は現實生活上の一大勢力となるに至つた。又彼は政府の貿易干涉は一般に有害であると論ずるものとして國內に於ても國外に於ても最も廣く知られてゐる。彼は一面に私利が個人交易者を驅つて社會共同體に有害な行爲を爲さしめることある多くの事例を擧げてゐる。然るに政府が最善の意圖をもつて行動する場合に於てさへ、殆んど常に個人交易者—そが如何に利己的なりとするも—の企業心よりも公共に奉仕する所劣ると主張した。彼はこの學說を辯護し、この辯護は世界に非常に重大な印象を與へ、ために多くの獨逸學者がスミス主義 Smithianismus と言ふ場合には主としてこの點を見て言ふのである(8)。

併し彼の主要業績は價値理論をも經濟學を統一體科學たらしめる中心となることにあつた

(8) 獨逸でこの用語を通俗に用ふる場合には、單にアダム・スミスが個人利益の自由伸長をもつて政府干涉よりも公共福利(ウイール)の上に效果多しと思惟したといふことのみならず、更になほこの自由伸長が理想的に最善の狀態に作用したといふ意を含んでゐる。併し主要獨逸經濟學者は、彼が私人利益と公共善利との屢々背馳するを絕えず主張してゐたことを熟知してゐる。スミス主義といふ用語の舊式用法は漸次信を失ひつゝある。例へばクニース Knies, Politische Oekonomie. ch. III. § 3 がかゝる衝突の詳細な引例を『諸國民の富』から引照するを見よ。なほ Veilbogen, Smith und Turgot 及び Zeisig, Smith und der Eigennutz を見よ。

併し結局右は彼の主要業績ではなかつた。彼の主要業績は佛國及び英吉利の同時代者先行者の價値思索を結合し開展することにあつた。彼をして思想上に一時代を劃せしめた最高の效績は、價値が人間動機を測定する狀態を細心且つ科學的に探究した最初の人たることにある。即ち價値は一面に富を得んとする購買者の願望を測定し、他面富の生產者の行ふ努力犧牲(即ち『實質生產費』)を測定するのである(9)。

(9) 價値と生產費との諸關係はフィジオラット及びそれ以前の幾多の著述家が之を

指摘してゐた。この人々の中ではハリス Harris カンティヨン、ロック、バーボン、ペティーを擧げていゝ。ホッブス Hobbes さへも擧げていゝ。ホッブスは豐饒性が海陸の自然恩惠を加工し蓄積するために人間の行ふ勞働・制慾に依存する旨を漠然とではあるが暗示してゐる—proventus terrae et aquae, labor et parsimonia.

彼が自身の致しつゝあつた業績の全幅の趣旨を明かにしなかつたことは可能である。彼の追隨者の多くが之を認知しなかつたことは確實である。併しそれにも拘らず『諸國民の富』以後に出た最優秀の經濟學的勞作はそれ以前に出た最優秀の勞作から見て次の點に於て卓越してゐる。それは貨幣を通じて一面に一物所有の願望と他面直接間接にこの物の產出に參加する一切多樣の努力・克己との比較秤量を一層明かに直視してゐる點である。他の諸學者がこの方面に進めた歩みは重要ではあつたが、彼の行つた前進は非常な大進歩であつて、彼は眞實この新見地を開き之によつて一時代を劃した程である。この點に於て彼と彼の前と後とに出た經濟學者は新しい學術的觀念を發明しつゝあつたのではない。彼等は通常生活上の卑近な觀念に明確性と精確性とを與へつゝあつたに過ぎぬ。事實に於て分析的な精神習性を持たぬ通常人は貨幣が現實に動機・幸福を測定するよりも以上に精細・精密に之を測定するものと見易い。その理由は一には通常人がこの測定の行はれる狀態を考へ拔かないことにある。經濟學の言葉は學術的であり、通常生活の言葉よりも現實を離れてゐるやうである。併し實はそれよりも一層現實に近いのである。何となればそれは一層細心であり差異と困難とを一層考慮するからである(10)。

(10) アダム・スミスは、經濟科學が事實の研究に基礎をおかねばならぬ一面にその事實が非常に複雜であること、及びその事實は一般に直接には何事をも敎へぬことを明白に認めてゐた。この事實は細心の推理と分析とによつて之を解釋せねばならぬ。又ヒュームの言つた通り、『諸國民の富』は『奇怪な諸事實によつて非常に豐かに例解されてゐるので世人の注目を惹かずにおかぬ程である』。これ正にアダム・スミスの爲した所である。彼は詳細な歸納によつて結論を立證したことが餘りない。彼の立證の資料は主として何人も熟知してゐた事實、生理的・心性的・德性的事實であつた。併し彼は敎ふる所多い奇怪な事實によつてその立證を例解した。之によつて彼は彼の立證に生命と力とを與へ、その讀者をして現實世界の諸問題を取扱ひつゝあつて抽象を取扱ひつゝあるに非ずとの感をなさしめたのである。彼の書は、配列は良くないが、方法の一モデルである。アダム・スミスとリカードとが各々獨特の點に於て優越せることはニコルソン敎授 Nicholson(The Cambridge Modern History, Vol. X. ch. XXIV) が良く說いてゐる。

四　彼の後繼者は事實の研究を怠らなかつた。但しその一部の者は演繹推理に傾いた。

アダム・スミスの同時代者及び直後の後繼者は何れも彼の如き廣汎な均勢の精神を持たなかつた。併し彼等は優秀な業績を營んだ。各々自己の天才の生來の傾向により或はその著述當時の特定事件によりそれぞれ引きつけられた特定部類の問題に沒頭した。十八世紀のその以後に於ては主要經濟學書は歷史的・記述的であり、勞働階級殊に農業地方の勞働階級の狀態に關聯してゐた。アーサー・ヤング Arthur Young はその模し難い旅行記錄を續けた。イーデン Eden は貧民史を書き、この歷史は之に續いた一切產業史家の基礎ともなりモデルともなつた。他方マルサス Malthus は細心の歷史研究により、事實の問題として各國各時代に於ける人口發達を制する諸力如何を示した。

併し大體に於てアダム・スミス直後の諸後繼者中最も感化を及ぼしたのはベンタム Ben-tham であつた。彼自身は經濟學について餘り書かなかつたが、十九世紀初頭の新興英吉利經濟學派の學風を定めるに與つて力があつた。彼は一歩も讓らぬ論理學者であり何等明白な理由を與へ得ぬ一切の制限・制規を嫌つた。彼はこれらの制限・制規はその存在の正當根據を示すべしと要求し、その時代の事情はこの假借する所ない要求を支持した。英蘭が世界に於て無比の地位を勝ち得たのは、一々の新經濟運動に迅速に順應したためである。之に對して歐洲大陸諸國民は舊式方法に固着してゐたためその多大の自然資源を利用し得なかつた。從つて英蘭の企業家は、慣習・氣分の影響は企業事項については有害であり、少なくも英蘭に於てはこの影響は既に減少してをり減少しつゝありやがて消滅するであらうと考へる傾があつた。又ベンタムの門下は慣習に關はる要なしといち早く結論するに至つた。彼等にとつては、各人が常に自身の利益を最も良く促進する方針を見出さんとして焦慮しその方針に自由且つ迅速に追隨すると推定し、この推定の上に於て人間行爲の諸傾向を論ずれば足りたのである(11)。

ベンタムは何等理由を與へ得ぬ慣習・氣分の影響は企業事項については有害であり、少なくとも英蘭に於てはこの影響は既に減少してをり減少しつゝありやがて消滅するであらうと考へる傾があつた。又ベンタムの門下は慣習に關はる要なしといち早く結論するに至つた。彼等にとつては、各人が常に自身の利益を最も良く促進する方針を見出さんとして焦慮しその方針に自由且つ迅速に追隨すると推定し、この推定の上に於て人間行爲の諸傾向を論ずれば足りたのである(11)。

(11) 右の外、保安に對する熱烈な彼の要求も亦た別方面から彼の周圍の若い經濟學者に影響した。彼は元より熱心な改革者であつた。彼は各種人間階級間の一切の人爲的差別の敵であつた。彼は如何なる一人の幸福と雖も他の一人の幸福と同樣に重大であること、一切行爲の目標は幸福の全合計を增大するにあるべきことを力を込めて斷言した。彼は他の事情等しい限り富の分配が平等なればなる程この全合計の愈々大なるべきを認容した。それにも拘らず彼の精神は佛蘭西革命の恐怖に滿されてをり、極めて微かな保安破壞をも非常に重大な害惡であるとした。ために彼は大膽な分析家であつたに拘らず、現存私有財產制度を殆んど迷信的に尊信した。彼は自身この尊信を感じ且つその門下生の間にこの尊信を助成したのである。

五

これら經濟學者の多く政治家・商人は再び貨幣・外國貿易問題に身を投じた。これらの問題が初めて中世末期の

は抽速の一般化に傾いた

大經濟變動の初期に起つた際よりも一層の精力を込めてこの問題に投じた。彼等は現實生活に接觸してをり彼等の經驗は廣く、事實についての彼等の知識は廣大であつたから、一見する所彼等　恐らく人間本性の廣大な觀測を行ひその推理を廣汎な基礎の上においたかの如くに思はれるかも知れぬ。併し實際生活上の訓練は往々個人的經驗から餘りに抽速の一般化を爲さしめるものである。

彼等の業績は彼等が貨幣を取扱つてゐる限りは優秀であつた

彼等がよくその本領内に止まつてゐる限りは彼等の業績は優秀であつた。恰かも通貨理論は經濟科學の中に於ても、富に對する願望以外の人間動機を深く考慮するを怠つても餘り弊害の生ぜぬ部分である。よつてリカードが先導した輝かしい演繹推理派はこの理論に於ては安全な基礎を持つてゐたのである(12)。

(12) リカードは往々代表的英吉利人であると言はれてゐる。併し彼に缺けたるものは卽ち代表的英吉利人であつた。彼の力强い建設的獨創性は一切諸國民に於ける最高天才の特色である。併し彼が歸納を嫌ひ抽象推理を好んだのは、バヂオット Bagehot の指摘する通り、英吉利教育に基かずしてそのセミティック系統に基いてゐる。セミティック人種の殆んど一切の各分派は抽象を取扱ふに若干の特殊天才を持つてゐた。その内の二三の分派は貨幣取引業及びその近代的發展に關聯する抽象的計算に傾いた。リカードが自己の途を辿つて何等の誤もなく錯雜した迷路を通過して豫期しなかつた新結論に到達するその力量は古今無双である。併し彼の足跡に從ふことは英吉利人にとつてさへ困難である。彼に對する外國批評は原則として彼の業績の眞實の論旨と目的とを探出し得なかつた。蓋し彼は自身決して說明しないからである。彼は先づ一の假設の上に論を進め、次に他の假設の上に論を進める際に何を目的としてゐるかを決して示さない。又彼の種々の假設の諸結論を適當に組合せれば之を多種多樣の實際問題に適用することが如何に可能なるかを決して示さない。彼は元來出版のために著述したのではない。特殊の困難ある諸點についての彼自身及び恐らくは少數友人の疑問を一掃するためである。これらの友人は彼と同じく實際家であつて生活事實に關する廣大な知識を持つてゐた。彼が事實の少數部類から導く特定歸納よりも一般經驗に適正な廣汎な原理を好んだ原因は玆にある。併し彼の知識は一面的であつた。彼は商人を理解したが勞働者を理解しなかつた。さりながら彼の同情は勞働者の側にもあつた。彼は雇主等が團結し得ると同樣相互扶助のために勞働者が團結する權利を辯護する友人ヒュームを後援したのである。下記第九附錄參照。

外國貿易を取扱ふ場合も然り

經濟學者は次に外國貿易理論に立入つて、アダム・スミスガンの理論中に殘した缺陷の多くを拭ひ去つた。經濟學の諸部分の中で、貨幣理論を除いては、この理論程演繹推理の域内に在る部分は他にない。自由貿易政策の詳細な論議が嚴密に經濟的ならざる多くの考察點をも考慮せねばならぬは眞である。併しこれら考察點の大多數は農業國殊に新國には

彼等は統計をも疎かにしなかつた

勞働階級狀態の調査をも忘らなかつた

併し彼等は比較的方法の知識を缺いた

重要であるに違ひないが英蘭の場合には餘り關係がなかつた。

この時代の總てを通じて經濟事實の研究は英蘭では疎かにされなかつた。ペティー、アーサー・ヤング、イーデンその他の統計的研究はトゥーク Took マカロック及びポーター Porter が立派に繼續した。尤も彼等の著書に於ては商人その他の資本家に直接興味ある事實のみを不當に重大視したのは眞である。併し議會は經濟學者の影響によつて賞嘆すべき多數の勞働階級狀態調査を實行したのであつてこの調査については右の如く言ひ得ないのである。事實に於て、十八世紀末及び十九世紀初頭英蘭に出た公・私統計集及び經濟史は經濟學上に於ける系統的な歷史的・統計的研究の淵源であると見て先づいゝのである。

それにも拘らず彼等の業績には若干の偏狹があつた。その業績は眞に歷史的であつた。併しその業績の大部分は『比較的』comparative ではなかつた。ヒューム、アダム・スミス、アーサー・ヤングその他は自身の本能的天才とモンテスキューの範例とに導かれて時に各時代、各國の社會的事實を比較しこの比較から教訓を導かうとしたことがある。併し何人も系統的考案に基いた比較的歷史研究の觀念を扼んでゐなかつた。その結果當時の著述家は、現實生活事實の探求上に於て有能・眞劍であつたにも拘らず、やゝ放縱に論を進めた。彼等は吾々が今日致命的に重要であると見る部類の事實を全部見逃し、又往々彼等の集めた部類の事實をも最善に利用しなかつた。彼等が事實の蒐集からこの事實に關する一般推理

彼等は單純なるを欲した時には人類がシー・メンティ精神習性を有する如くに論じた

に進んだ場合には右の偏狹は度を强めたのである。

六　さりながら彼等は人間性格がその境遇に依存するを十分に認めなかつた。この點に於ける社會主義的憧憬と生物學的研究との影響。ジョン・ステュート・ミル。近代業績の諸特色

リカードとその追隨者は議論の單純を期したがために往々人間を一の不變量と見るが如くに言つてゐる。彼等はこの人間の變差の研究に十分の勞を取らなかつた。彼等が最も親密に知つてゐた人々はシティー・メン city men であつて、彼等は時に不用意な表現を用ひたため、恰かも他の英吉利人も彼等が商業區域(シティー)に於て知つてゐた英吉利人と甚だ酷似してゐると暗に言はん許りであつた。

彼等は他の諸國の住民が研究に慣する諸特性を持つてゐることを知つてはゐた。併し彼等はかゝる差異を表面的のものとし英吉利が何時でも教へやうとしてゐた一層よき途を他の諸國民が知るに至つたならば直ちに除去されるものと見た。恰かも英吉利法律家をして印度人に英吉利法を課せしめるに至つたと同じ精神傾向は、英吉利經濟學者をして世界はシティー・メンより成るとの暗默の推定の下にその理論を說かしめるに至つたのである。彼等經濟學者が貨幣・外國貿易を取扱つてゐた限りは之も餘り弊害を生じなかつたが、各種產業階級間の關係については之は經濟學者を迷はせて了つた。之がために經濟學

者は勞働を一貨物として說くに至つた。彼等自ら勞働者の立場になり切ることもなく、勞働者の人間的情熱、その本能習性、その同情反感、その階級的嫉妬階級的愛着、その知識と活力ある自由行爲を行ふ機會との缺乏について爲すべき斟酌を少しも考へなかつた。從つて彼等は供給需要の力が現實生活に見るよりも遙か以上に機械的規則的作用を爲すものとした。彼等は當時の英蘭に於てさへ眞實妥當しなかつた利潤賃銀に關する法則を立てたのである(13)。

(13) 賃銀については、彼等が自身の前提から導いた結論に若干の論理的誤謬さへある。これらの誤謬をその根源に遡つて追つて見ると不用意な表現樣式以上に重大なものは殆んどない。併しこれらの誤謬を熟心に取り入れた人々は、經濟學の科學的研究の意は殆んどなく、たゞ單に勞働階級をその地位に固定せしめおく目的のために經濟學上の學說の引用を事とした人々である。かくしてこの學派の『寄生蟲』獨逸で通常彼等に充て用ひる用語を借りれば)は經濟學說を單純化すると唱へながら實はこれらの學說を眞たらしめるに要する諸條件を拔いて學說だけを唱道してゐたのである。恐らく如何なる他の大思想派と雖もかくの如くにして毒せられたことは未だ曾てない。マルティノー! Martineau 嬢は工場法反對の激越な著作によつてこれらの叙述に若干の色彩をつけた　シーニオル Senior も亦たこの反對側に與して著作した。併しマルティノー嬢は言葉の本來の意味に於ての經濟學者ではない。同嬢は心に加はる重壓が過大になるのを恐れて諸經濟學原理を例解する說話を書いたのであるが、之を書く前に未だ一經濟學書の一章以上を讀んだことがないと告白してゐる。又同嬢は死亡する前に、經濟學(同嬢の理解した如き)上の諸原理に果して妥當性があるか否かといふ正しい疑問を發してゐる。シーニオルが工場法反對論を書いたのは、彼が經濟學の研究を始めた許りの時であつた。數年後彼は正式にその意見を取消した。マカロックも工場法反對者であつたと時々言はれてゐるが、事實に於ては彼は衷心之を支持したのである。トゥークは小委員會の委員長であつた。鑛山に於ける女子・少年雇傭に關する彼の報告は輿論を喚起し之に對する決然たる行動に出でしめた。

彼等は人間性格がその境遇に依存するを十分に認めなかつた

併し彼等の致命的過失は、產業習性、產業制度が如何に變化し易きものであるかを認めなかつたことである。特に彼等は貧民の貧乏の原因は虛弱、無能率にあり貧乏はこの虛弱無能率の主要原因たるを認めなかつた。近代經濟學者は勞働階級狀態の多大の改善の可能を信ずるものであるが彼等はこの信念を持たなかつたのである。

社會主義者

元より社會主義者は人間の完全化性を主張した。併し彼等の見解は殆んど歷史的科學的研究に基いてをらず、その見解の表現は無法であつたため、その時代の企業家的經濟學者の輕蔑を買つた。社會主義者はその攻擊する學說を研究しなかつた。彼等が現存社會組織の本質と能率とを理解してゐなかつたことを示すのは困難でない。從つて經濟學者は

社會主義者の學說の何れをも細心に檢討せず、中にも人間本性に關する彼等の思索を檢討すること最も少なかつた(14)。

(14) マルサスは部分的例外である。彼の人口研究はゴドウィンの論文に啓示を得た。半世紀後バスティア Bastiat ―明快な著述家ではあつたが深い思想家ではなかつた―は、競爭の影響の下に於ける自然的社會組織をもつて實際上實現される最善の組織たるのみならず理論上思考し得る最善の組織とさへする無法な學說を採つてゐた。

併し社會主義者は強く感じた人々であり、經濟學者が少しも考慮しなかつた人間行爲の隱れた發動力について何事かを知つてゐた人々である。彼等の粗暴な熱狂詩の間に埋れて鋭い觀察と含蓄ある暗示とがあり、哲學者經濟學者の學ぶべき所が多い。かくて彼等の影響は漸次現れ始めた。コントが社會主義者に負ふ所は甚大であつた。ジョンステュアート・ミルの生活の危機は彼自ら自叙傳中に傳へてゐる通り、社會主義者の書を讀んだために來たのである。

七

富の分配といふ致命的問題に關する近代的見解を十九世紀初頭に行はれた見解と比較

經濟學者は人間本性の可撓性を考慮する傾向を强めつゝある

之は一には生物學的研究の影響に基く

するに當つて、細目點の變化と推理の科學的精確性の改善とは非常であるが、それらの總てにも勝つて、取扱上の根本的變化があるのが分つた。蓋し舊時の經濟學者が人間の性格能率を恰かも一固定量を見るべきものゝ如く論じてゐるに對し、近代經濟學者はこの性格能率をもつて人間の在住する境遇の產物なる事實を絕えず心に置いてゐるからである。かくの如き經濟學者の視點の變化は何に因つて來たか。それは一には過去五十年間に於ける人間本性の變化が非常に急速であつて人の注意を惹かざるを得なかつたことに基き、一には個々の著述家、社會主義者その他の直接影響に基き、一には自然科學の若干分科に於ける同樣の變化の間接影響に基くのである。

十九世紀初頭數理的物理的科學部門は發達しつゝあつた。これらの科學は互に異なつてゐるが一の共通點を持つてゐる。それは彼等の研究對象が一切諸國一切時代を通じて恒常不變たることである。科學の進步は人の精神に親しく知られてゐたが科學の對象の發展は人の精神に知られてゐなかつた。世紀も進行するにつれて、生物學的科學部門は徐々に進みつゝあつて、人は有機的發達の本質に關する一層明確な觀念を得つゝあつた。若し一科學の對象が諸種の發展階段を通過するならば一階段に當嵌まる法則は之を變形しなければ殆んど他の諸階段に當嵌まらぬことを人は學びつゝあつた。科學の法則は科學の取扱ふ事物の發達に應じて發展せねばならぬ筈である。この新觀念の影響は漸次人間

に關係する諸科學にも及んで、ゲーテ、ヘーゲル、コントその他の業績に現れるに至つた。

遂に生物學の思索は長足の進歩を遂げた。生物學上の諸發見は恰かも舊時に於ける物理學の如く、世界の注意を魅倒した。精神的・歷史的科學の音調には著しい變化が起つた。經濟學はこの一般運動に參加し、人間本性の可撓性と人間性格が時の富の生產・分配・消費方法に影響し且つ影響される所以とに對して年々歲々一層の注意を拂ひつゝある。この新運動の最初の重大な指示者はジョン・ステュアート・ミルの賞嘆すべき『政治的經濟學の諸原理』Principles of Politial Economy に現れたのである(15)。

近時の英吉利經濟學者

(15) ジェームス・ミル James Mill はその子をベンタムとリカードとの端嚴な學風で教育し、子の精神の中に明快と明確とに對する熱望を植ゑつけた。かくてジョン・ミルは一八三〇年に經濟學的方法について一論文を著はし、その中で斯學上の抽象に對して一層輪廓の鋭さを與へんことを提唱した。彼はリカードの暗默の假定卽ち經濟學者は富に對する願望以外何等の行爲の動機をも多く考慮する要なしとの假定に直面した。彼は明確に叙述せざる限り右は危險であるが、叙述する限りは危險でないとし、熟慮的に明白に之に基いた著書を著はさんことを半ば公約した。併し彼はこの約束を果さなかつた。一八四八年に彼の經濟學上の大作を公にする前、彼の思想と感情との音調の上に一の變化が起つてゐた。彼はこの著を『政治的經濟學の諸原理、附、社會哲學への若干應用』Principles of Political Economy, with some of their Applications to Social Philosophy と名づけ(彼が『他の社會哲學諸分科への』と言はなかつたには意味がある。Ingram, History p. 154 參照)、この中に於ては人間の唯一の動機を富の追求にありと假定する推理と然らざる推理との間に嚴重な分解線を引いてをらぬ。彼の態度のかゝる變化は彼の周圍の世界に進行しつゝあつた大變化の一部であつた。たゞ彼はこの大變化が彼に及ぼした影響を十分自識してゐなかつた。

近代英吉利業績の諸特徵

ミルの追隨者はリカードの直系追隨者の採つた立場に離反してミルの起した運動を續けて行つた。かくて機械的分子と區別される人間的分子が經濟學上に占める地位は愈々顯著となりつゝある。現存學者は言ふ迄もないが、この新氣風の現れてゐるのはクリフ・レスリー Cliffe Leslie の歷史的研究であり、バヂオット、ケアンズ Cairnes トインビー Toynbee その他の多方面の業績である。併し分けてもジェヴンスの業績である。彼は最高級の多樣の素質の多くを稀に見る程兼備してゐたのであつて、之によつて彼の業績は經濟史上に永遠の重大な地位を占めるに至つた。

社會的義務についての高級觀念は到る處に普及しつゝある。議會・新聞・演壇に於て人道の精神は一層明白に一層眞劍に語つてゐる。ミルとその追隨者とはこの一般運動の前進を助け、この運動は又彼等自身の前進を助けた。一にはこの理由により、なほ一には歷史的科學の近代的發達の結果により、彼等の事實研究は一層廣汎であり哲學的であつた。昔の經濟學者の中の一部の人々の歷史的・統計的業績に—よし比肩すべきものありとしても—

教義の放棄と分析の發達

殆んど比肩すべきものがなかつたのは眞である。併し彼等の到達し得なかつた多くの情報を今日は何人も手にすることが出來る。マカロックの如く實際業務に精通せず彼の如き廣大な歷史的教養を有せざる經濟學者と雖も、彼の取扱つた事實よりも一層廣汎明白な眞の生活事實に對して經濟學說が如何なる關係に立つかを認知し得るに至つた。この點に於て經濟學者を助けたものは一切科學―歷史を含む―の方法上に生じつゝあつた一般改善であつた。

卽ち凡ゆる點に於て經濟學は今や從前よりも精密になつた。何等かの研究に於て假定される前提は以前よりも嚴重な精確性をもつて叙述される。併しこの思想の精密性の增大はその作用から見て一部分破壞的である。それは舊來の一般推理の應用の多くが妥當せざりしことを示しつゝある。何となればこれらは含意されてゐた一切の諸假定を考へ拔いて、論究の下にある特殊の場合に果してこれらの假定を下し得るや否やを明かにする勞を取らなかつたからである。その結果として多くの教義は破壞された。これらの教義はたゞ單に不用意に表現されてゐたが故に單純の觀を呈してゐたものであるが、この理由そのものによつて黨派的論爭者(主として資本家階級)の爭鬪のためにする武器となつてゐたのである。この破壞作業は一見する所經濟學上の一般推理道程の價値を減じたかの如く見えるかも知れぬ。併し事實としては之はその反對の結果を來した。この作業は一層新しき一層强固なる機械(研究手段)のために土地を切り開き、この機械は健實に辛棒强く建設されつゝある。經濟問題の諸困難との戰に於ける最初の正面衝突に堪へた人々は善良且つ偉大な人々であつて、吾々自身が一層容易な道程を進むのも彼等の開拓的作業に負ふ所大であるが、右の如き破壞作業は吾々をして彼等よりも一層廣汎な生活觀を取るを得せしめ、例へ彼等よりは遲々たりとも一層安全に進み彼等よりも科學的に且つ著しく非教義的たるを得せしめたのである。

凡そ科學的方法の初期の發展階段に於ては、自然の發動を簡單容易な文章をもつて記述し得るやうにする目的をもつて、自然の發動を傳習的に單純化されたものとして表した。然るに一層高い發展階段に於ては自然發動を一層細心に研究し、例へ單純性と明確性とを、更には外見上の鮮明性をさへ少しく失ふといふ犧牲を拂つてもなほ且つ一層實狀に近く表してゐる。(經濟學方法上の)叙上の變化も恐らくかくの如く科學的方法が初期階段から高度階段の進步の途上の一通過と見てよからう。曾ては經濟學上の一般推理は人氣の頂上にあつてその權威に双向ふものは殆んどなかつたが、吾々の時代には一步一步敵對的批評を浴びてゐる。故に右に述べた變化の結果として、經濟學上の一般推理は從來よりも吾々の時代に於て一層迅速な進步を遂げ一層堅固な地位を作つたのである。

以上は單に英蘭の立場からのみ近時の進步を見た。併し英蘭に於ける進步は全西洋に

廣く亘つてゐた一層廣大な運動の一面たるに過ぎなかつた。

八

英吉利經濟學者は諸外國に多くの追隨者と多くの批評家とを持つた。佛國學派は十八世紀の自國大思想家以來不斷の發展を遂げ、二流の英吉利經濟學者に共通であつた多くの誤謬・混亂、特に賃銀に關する誤謬・混亂を避けた。セイ Say 時代以降佛國學派には多大の有益な業績があつた。同學派中に於てクールノー Cournot は最高天才者たる一建設的思想家であつた。他方フーリエ Fourier サン・シモン St Simon プルードーン Proudhon 及びルイ・ブラン Louis Blanc は社會主義の最も貴重な暗示の多くを爲すと共に社會主義の最も粗暴な暗示の多くをも爲した。

佛國經濟學者

近年に於ける最大の相對的進歩は恐らく米國の行つた進歩である。一時代前迄は、經濟學上の『米國學派』はケリー Carey の先導に追隨した保護主義者の一團から成つてゐるものと推定されてゐた。併し今や活力ある思想家の諸新學派が興りつゝある。米國は既に經濟實踐の上に於ては主導的地位を占めて來たが、今や經濟思想上に於ても之と同じ主導的地位を占めんとする兆候がある。

米國經濟學者

經濟科學はその古の母國中の二國即ち和蘭と伊太利とに於て活力更新の兆を示しつゝある。殊に墺太利經濟學者の力强い分析的業績は一切諸國に於て多大の注意を惹きつゝある。

獨逸經濟學者

併し大體に於て近時大陸に行はれた經濟學的業績中の最重要なものは獨逸の業績である。獨逸經濟學者は一面にアダム・スミスの先導を認めつゝ、彼等が目してリカード學派の島國的狹量・自負とするものによつて他の何れの人々よりも刺戟された。英吉利の自由貿易辯護論者は英蘭の如き工業國について立てた命題も何等の修正を加へずして農業國に移し得べきを暗默の裡に推定したから、獨逸學者は特に之を憤つた。リスト List の蟬かしい天才と國民的情熱とはこの推定を覆へして、リカード派が自由貿易の間接結果を殆んど考慮せざりしことを示した。英蘭に關する限りはこれらの間接結果を無視しても重大な危害はないかも知れぬ。何となれば英蘭に於てはこれらの間接結果は大體に於て福利であつてその直接結果の力を增したからである。併し彼は獨逸更に著しくは米國に於ては、その間接結果の多くは害惡であつたことを示し、これらの害惡がその直接福利を打消したと主張した。彼の議論の多くは妥當でなかつたが、その一部は妥當であつた。英吉利經濟學者は彼の議論を嘲笑して辛棒强く之を論議することを拒んだが、他方公共精神に富む有能な人々は健實であつた議論の力に印象を受けて、他の非科學的な―併し―右よりも一層大なる力をもつて勞働階級に迫つた議論の人氣取り煽動のために之を用ひたのである。

リスト

米國工業家はリストを自身等の辯護者と目した。工業家はリストが彼等のために書いた通俗書を廣く流布せしめた。これ卽ちリストの名聲の揚る端緒であり、同時に米國に於ける保護主義學說の系統的辯護の起る端緒であつた(16)。

(16) 近代的相互交通は各國民の發展を同時的たらしめる傾向がある。リストがこの傾向を看過したことは旣に述べた。彼の愛國的熱誠は多くの點に於て彼の科學的判斷を誤らしめた。併し獨逸學者は熱心に彼の議論に耳を傾けた。その議論によれば各國は英蘭が通過したと同じ諸發展階段を通過すべきであり、英蘭は農業階段から工業階段への過渡期に當つて自國工業を保護したのである。彼は眞理に對する純眞の欲求を持つてゐた。彼の方法は一切種類の獨逸學者殊に歷史學者・法律學者が熱烈に追求した比較研究方法と一致してゐる。彼の『政治的經濟學新體系の綱要』Outlines of a New System of Political Economy は一八二七年フィラデルフィアで出て、その『政治的經濟學の國民的體系』Das nationale System der politischen Oekonomie は一八四〇年に出た。ケリーがリストに負ふ所大であるか否かは議論ある點である。Miss Hirst, Life of List, ch. IV を見よ。兩者の間の一般關係についてはクニース Kniess, Pol. Oek., 2nd edition, pp. 440, etc. を見よ。

獨逸學者は一面に個人主義に對し

獨逸學者の好んで言ふ所によると、フィジオクラットとアダム・スミス學派とは國民生活の重要性を輕視し、彼等は一面に利己的個人主義のため他面に弱々しい博愛的世界主義の

他面に世界主義に對して國民主義を唱導する

ために この國民生活を犧牲とする傾向があつた。彼等の論ずる所によると、リストは愛國主義感情を刺戟して大功績を殘し、この感情は個人主義感情よりは雅量に富み、世界主義感情よりは豪壯明確である。フィジオクラットと英吉利經濟學者との世界主義的同情が獨逸學者の考ふる程に强かつたか否かは疑問である。併し獨逸近時の政治史が獨逸經濟學者の國民主義的風潮に影響したについては問題はない。獨逸は四面强力な侵略的軍隊に圍まれてをり熱烈な國民的感情の後援なくしては生存し得なかつた。獨逸學者は國際間の經濟關係に於ける利他的感情は個人間の經濟關係に於けるよりも力弱いことを熱心に―恐らく餘りに熱心に―說いたのである。

彼等の大業は比較研究方法によつて經濟史を一般歷史に及ぼし立法に關聯せしめて研究したためにある

併し獨逸學者は同情の上に於ては國民的であつたにしても、研究の上に於てはいみじくも國際的であつた。彼等は經濟學に於ても一般歷史に於ても『比較』comparative 研究の先驅をなした。彼等は國を異にし時代を異にする社會現象・產業現象を對比せしめ、これらの現象を整頓して現象相互に光明を投ぜしめ相互に解釋せしめ、これら現象の總てを暗示多き立法史と結び付けて研究した(17)。この派に屬する人々中の少數者の業績には誇張の跡があり、リカード學派の推理に對する偏狹な輕蔑の跡がある。彼等は自身リカード學派の論旨と目的とを理解しなかつた。之がため多くの激烈・冗漫な論爭を惹起した。併し殆んど例外なくこの派の諸主導者にはこの偏狹がなかつた。彼等とその共同勞作者とが他の

諸國に於て經濟習性・經濟制度の歷史の調査と說明との上に營んだ業績の價値を過重視するは難からう。そは吾々の時代の最大事績の一であり、吾々の實質富の重大な增加である。吾々の觀念を廣め、吾々自身についての吾々の知識を增加し、人間の精神生活・社會生活と之に體現してゐる神の原理との進化の理解を助ける上に於て何物よりも效があつたのである。

經濟理論及び分析上の彼等の業績

(17) この業績の優秀なるは恐らく一には獨逸に於ては他の大陸諸國に於ける以上に多くの志望に至る課程上に法律學的研究と經濟學的研究とが結合してゐるに因る所もある。優れた一例はワーグナー Wagner の經濟學上の諸貢獻である。

彼等は斯學の歷史的取扱とその獨逸社會生活・政治生活狀態への應用、殊に獨逸官僚の經濟義務への應用に主力を注いだ。併し彼等はヘルマン Hermann の輝かしい天才に指導されて、細心深遠な分析を行つて吾々の知識を大いに增加し、經濟理論の領域を著しく擴大した(18)。

(18) かゝる點については、英吉利人も獨逸人も墺太利人も否各國人悉く、他國人の許容する以上の業績を遂げたと自任してゐる。その理由は一には各國人それぞれ獨特の知性的長所を持ち外國人の著書中の長所を見逃し、他面各國人は自國人の短所に對する外國人の非難を全部理解するに至らぬことにある。併しその主たる理由は、一新觀念が一般に漸次に發達するものであり、且つ往々一國民以上が同時にその助成に努めるため、それら諸國民の各々は勿もすると之を自己獨特のものとし、各々他國人の獨創性を輕視し易いことにある。

獨逸社會主義

獨逸思想は又社會主義の研究と國家機能の研究とに刺戟を與へた。現存所有權の附帶事項に殆んど無關係に世界の財產を社會共同體の福利のために利用するについての近時の諸命題は多いが、世界がその內の最も徹底的なものゝ大部分を得たのは獨逸著述家からである。その內の一部の人々は猶太系であつた。精細に檢討して見ると、彼等の業績は一見して思ふ程獨創的でもなければ深くもないのは眞である。併し彼等の業績はその辯證法的明敏とその輝かしい樣式とにより、或る場合には廣い――尤も曲解的な――歷史的敎養とによつて非常な力を持つてゐる。

革命的社會主義者の外に、獨逸にはなほ多數の思想家の一團がある。この人々は現在の形態に於ける私有財產制度はその權威の根據を歷史に求めてもその權威の貧弱なることを主張し、廣汎な科學的哲學的根據に基いて個人權利に對立するものとしての社會の權利を再考せんことを切論せんとしつゝある。近時獨逸民族の政治的軍事的制度は、英吉利人の場合に於けるよりも一層政府に依賴し個人的企業心に依賴せざる生來の傾向を增大し來つた。かくて社會改良に關する一切問題に於て英吉利國民と獨逸とは互に多くを學ぶべきである。

細心の科學は通俗的推理なら向いで苦しみつゝあるんぜ仕事輕れて危險がある

併し一切の歷史的教養と時代の改革的情熱との間に在つては、經濟學上の勞作中の困難な—併し—重要な部分が輕んぜられる危險がある。經濟學の人氣は或る程度迄細心、嚴肅な推理を輕んずる傾を持つた。生物學的經濟學觀と稱せられてゐたものが愈々顯著となつて經濟法則、經濟測定の觀念を後に投げやる傾を持つた。恰かもかゝる觀念は之を生きつゝ絶えず變化する經濟有機體に適用するに餘りに固定不動であるとする如くである。併し生物學自體は脊椎有機體が最高度に發達せる有機體なることを教へる。近代經濟有機體は脊椎有機體である。之を取扱ふ科學は非脊椎的たるべからざるものである。そは世界の現實現象に密接に適合し得るために要する觸覺の纖細と受感性とを持つべきである。併しそれにも拘らずなほ細心な推理、分析といふ堅固な脊骨を持たねばならぬ。

第三附錄(1)　經濟學の範圍と方法

(1) 第一編第二章を見よ。

一　一統合社會科學は望ましいが不可能である。コントの暗示の價値、その否定の弱味。

一統合社會科學は望ましいが不可能である

一部の人がコントと共に主張する所によると、人間行爲に關する有益な研究の範圍は社會科學全體と廣さを同じくせねばならぬ。彼等の論ずる所によると、社會生活の一切面は非常に密接に關聯し、これらの面の何れか一に關する特殊研究は無效でなければならぬ。彼等は經濟學者に向ひ、その專屬の役割を棄てゝ一切を包括する一統合社會科學の一般促進に精進せんことを要求する。併し社會に於ける人間行爲の全範圍は單一の知的努力によつて分析し說明するべく餘りに廣大、多樣である。コント自ら及びハーバート・スペンサーは無比の知識と偉大な天才とをもつてこの任に當つた。彼等はその廣汎な觀測とその暗示ある示唆(ヒント)とによつて思想上に時代を劃した。併し彼等は一統合社會科學の建設を開始したとさへも殆んど言ひ得ないのである。

希臘の天才は輝かしかつたが性急であつて、一切物理現象の說明の單一基礎を求めて已まなかつた。希臘の天才がかゝるものを求めて已まなかつた間は、物理的科學の進步は緩

經驗の示す通りである

物理的科學の推論は歷史から得る通りである

コントは極端な專門化の弊をよく示した

慢であつた。近代に於て物理的科學が長足の進歩をしたのは、廣汎な諸問題をその構成部分に分解したに基くのである。疑ひもなく自然の一切諸力の根柢には一の統一性がある。併しこの統一性の發見に向つて少しでも進歩があつたならば、それは全體としての自然の分野の時々の廣汎な觀測にも依るが、なほ不屈の專門的研究によつて得た知識にも依る所あつたのである。吾々は社會有機體の發達を支配する諸力を理解し得るが、現在に於て理解し得るよりも更に一層よく將來の時代をして之を理解せしめるための資料を供するにも亦た同樣の辛棒强い細目勞作を要するのである。

併し他面に於て全然コントに承服せねばならぬ點がある。それは物理的科學に於てさへも、自己の主力を狹い分野に集中しつゝある者は近接分野に從事しつゝある者と絶えず密接に接觸する義務があるといふことである。自己の領域以外を少しも顧みぬ專門家は眞正の輕重判斷を過つて事物を偏狹に見易い。彼等の集める知識の多くは比較的に殆んど用をなさぬ。古い諸問題は既に意義を多く失ひ、之に代つて新視點から生じた新問題が起つてゐるのであるが、彼等はかゝる古い問題の細目點を徒らに懸命に研究する　各科學はそれぞれその周圍の諸科學と比較し類同を求め、之によつて各科學の進歩は多大の光明を投ずるのであるが、彼等はかゝる光明を與へ得ない。從つて社會現象の連帶性から見て排外的專門家の業績は、物理的科學に於けるよりも社會科學に於てこそ更に一層無效であ

併し專門があつてはならぬとは證明し得なかつた

るとコントが主張した功績は大である。ミルは之を承服して續けて言ふ—『經濟學者であるといふ以外に何者でもない人は恐らく立派な經濟學者にはなれぬ。社會現象は互に作用し反作用し、之を引離しては正しく理解し得ない。併し之は決して、社會の物質的產業的現象が有益な一般化を許さぬといふことを證明するものではない。たゞこれらの一般化は必然一定文明形態及び一定社會發展階段に相對的でなければならぬといふことを證明するのみである』(2)。

(2) Mill, On Comte, p. 82. コントのミルに對する攻擊は一般原則を例證するものである。その一般原則とは、方法及び範圍の討論に於ては、人は自身の研究方針の有用性を辯護しつゝある場合には略ぼ確實に正しく、他人の研究方針を否認しつゝある場合には誤つてゐるといふ原則である。現在米・英その他の諸國には社會學に向つて進む運動があるが、この運動は經濟學その他の社會科學分科の收約的研究の要を認めてゐる。併し恐らく社會學といふ用語を用ふるは尙早である。蓋しこの用語は社會科學の統合が既に目前に迫つてゐると認める如くだからである。若干の優秀な收約的研究は社會學の名の下に發表されたが、今日迄行はれたこれら統合の努力が何等かの大成功を收めたか否か疑問である。それは後の時代者—彼等の學識は吾々自身の學識程この大任のために不十分ではないであらう—の指導のために通路を準備し路上の陷穽に危險標を立てる程度に止まつてそれ以上には出てゐないので

経済諸力は化學的に結合せずして寧ろ力學的に結合する

ある。

二　經濟學物理學生物學の方法。

經濟學の取扱ふ諸力の結合法はミルの言つた通り化學の結合法に非ずして寧ろ力學の結合法である。この事實あるが故に經濟學の取扱ふ諸力が演繹的取扱に適する一長所を持つは眞である。即ち吾々が二經濟力の作用を各別に—例へば一生產業に於ける賃銀率の增加と作業困難の減少とが各別に該生產業に於ける勞働供給に及ぼす影響の如きを—知つてゐる場合には、相應よくこの二力の合成作用を豫測し得るのであつてその特殊實驗を待つ迄もないのである(3)。

(3) ミルは之を行ひ得る範圍を過大視し、之がため經濟學上の演繹的方法を過度に唱導するに至つた。彼の Essays の末尾、Logic, Bk. VI. 殊にその第九章を見よ。なほ彼の Autobiography, pp. 157—161 を見よ、經濟學的方法に關する著述家の意見の濃淡は種々であるが、彼も亦たこれら著述家と同樣、實踐上に於ては本職上の言明程に極端ではなかつた。

併し力學に於てさへ演繹推理の長い連鎖は實驗室內の出來事に直接適用あるのみである。これらの連鎖はそれ自體だけでは現實世界の異質的素材及び諸力の複雜不確定な結合を取扱ふに十分な指針とは殆んどならぬ。この目的のためにはこれらの連鎖を特殊實驗によつて補足する要があり、新事實の間斷なき研究と新歸納の間斷なき探求と調和を保ち且つ往々之に從屬的に適用する要がある。例へば機械技師は、裝甲艦が靜水上に於て安定を失ふ場合の角度を相應精確に計算し得る。併しこの裝甲艦が暴風雨の際に如何なる狀態を示すかを豫測するに當つては、彼は先づ豫測に先つて平靜な海上でこの裝甲艦の運動に注目してゐる經驗ある水夫の觀察を利用するであらう。經濟學が考慮すべき諸力は、力學上の諸力よりも多數であり不明確であり熟知されてをらず、その性質も一層雜多である。他面これらの諸力が働きかける素材は力學上に於けるよりも不確定であり且つ等質的でない。更に經濟諸力の結合が純粹力學上の單純な規則性によらずして寧ろ化學上の外見的恣意性による場合は決して稀なことでもなく重要でないのでもない。例へば或る人の所得の小增加は一般に彼の購入を一切方向に向つて增加するであらう。併しその大增加は彼の習性を變じ恐らく彼の自尊心を增し或る種の物を全然顧みざるに至らしめることがある。一流行が社會上層から下層に廣まれば、上層に於けるその流行を滅ぼすことがある。又更に吾々の貧民救濟の眞劍味が增加すれば、慈善は一層多く行はれ或は慈善の或る種の形式の必要を全然消滅せしめることがある。

併し經濟學は物理的科學とも毫も近縁關係を持たぬ

最後に化學者が取扱ふ事物は常に同じものであるが、經濟學は生物學と同樣內部的本質

たく解せられ生物學のあの一分科である

及び構成も外部的形態も共に不斷に變化しつゝある事物を取扱ふのである。化學者の豫測は總て暗默の假設に立つてゐる。その假設とは、その處理する標本が推定通りのものであるとの假設、或は少なくもその標本の不純性は單に度外視してゝい程度のものに過ぎぬとの假設である。併し彼と雖も生物を取扱ひつゝある場合には、特殊實驗の堅固な土地が視界を去つてもなほ著しく遠く安全な航海を續け得るといふことは殆んどない。一新藥劑が健康體の人に如何に作用するであらうか、更に一新藥劑が或る種の病人に如何に作用するであらうかを言ふためには、彼は主としてこの特殊實驗に依賴せねばならぬ。又若干の一般實驗を行つた後に至つてさへ、彼は體質を異にする人々に對し或は他の諸藥劑と新調合をした場合に、右の新藥劑の作用が思はぬ結果を生ずるを知ることがある。

さりながら企業信用、銀行、勞働組合主義或は協同組合等の嚴密に經濟的な諸關係を見れば、或る時と場所とに於て一般に成功した運用樣式が一樣に他の時と場所とに於て失敗してゐるのが分る。この相違は時には單純に一般覺醒の變動或は性格の德性的强固性及び相互信賴の習性の變差の結果として說明されてゐる。併しこの說明は往々之よりも困難である。甲の時或は場所に於ては人は著しく相互を信賴し共通福祉のために自己を犧牲とするであらうが、それも單に或る方向に於てのみである。乙の時或は場所に於ては之に類似の限定があるであらうが、その方向は違ふであらうし、この種の變差は總て經濟學上の演繹の範圍を限定する。

吾々の當面の目的のためには人種の可撓性の方が個人の可撓性よりも重要である。個人性格が一には外見上恣意的な狀態に於て、一には周知の原則に從つて變化するは眞である。例へば一勞働爭議に係はる勞働者の平均年齡は勞働爭議の進行する方向を豫見するに一重要分子たるは眞である。併し一般的に言へば、甲と乙との場所に於いても甲と乙との時に於ても、多血質の青年老年者と悲觀的な氣質の青年老年者とは略ぼ同じ割合を占めてゐる。故に性格上の特異性と性格の變化とは演繹的方法の一般適用には一見して思ふ程障害とはならない。即ち自然に向つての辛棒强い質疑と分析の進歩とによつて、法則の支配權は治療學上に於ても經濟學上に於ても新分野に侵入したのであつて、特殊實驗を離れた或る種の豫測は絕えず增加して止まない多樣の諸營力の各別的結合的作用についてゐる。

分析と演繹の業績と說明と豫測とは反對方向に向ふ同一動作である

三　說明と豫測とは反對方向に向ふ同一動作である。徹底的分析に基く過去事實の解釋のみが將來に對する良指針となり得る。

然らば經濟學上に於ける分析と演繹との機能は少數の長々しい推理連鎖を作り上げることでなくて、多數の短かい連鎖と個々の連結環とを正しく作り上げることにある。さりながら之は決して容易な業ではない。若し經濟學者が愉快な氣持になつて輕々に推理す

るならば、彼はその勞作の各所に於て不備の聯結を行ひ易い。彼は分析と演繹とを細心に用ふるを要する。その理由としては、この分析と演繹との助力によつてのみ彼は正しい事實を選擇し之を正しく部類分けし之を思想上の暗示と實踐上の指針とのために用ひ得るからであり、又總ての演繹が歸納の基礎の上に立たねばならぬことが確かであると同樣、總ての歸納的過程は分析と演繹とを伴ひ且つ含まねばならぬことも確かだからである。或は同じ意味を別に言ひ表せば、過去の說明と將來の豫測とは別個の動作ではなくして反對方向に働く同一動作である。一は結果から原因に、他は原因から結果に向ふ。シュモラーがいみじくも言ふ通り、『個別的原因についての知識』を得るには『歸納』を要し、『その終極結論は實に演繹に用ひた三段論法の逆に過ぎない……歸納と演繹とは同一傾向、同一信念、吾々の理性の同一必要に基礎をおくものである』。

一事件を說明するには、先づ第一にこの事件を左右し得べかりし一切事件とこれら事件が各別にこの事件を左右し得べかりし狀態とを發見しなければ、右事件を完全に說明し得ない。これらの事實或は關係中の何れかの分析が不完全なる限り、それだけ吾々の說明も誤謬に陷り勝ちであり、その中に潛在する推論は既に誤つた―尤も恐らく誠しやかである―歸納を作り上げる途上にある。之に對し吾々の知識と分析とが完全なる限り、單に吾々の心性的過程を逆轉するだけで、確實に將來を演繹し豫測し得るし、その確實性は同樣の知識の基礎の上に過去を說明し得ると同じである。豫測の確實性と說明の確實性との間に一大相違が生じ來るは、たゞ吾々が第一歩以上に進む場合だけである。蓋し豫測の第一歩に於ける何等かの誤謬は第二歩に至つて蓄積し强烈となり、他方過去の解釋に於ては誤謬は恐らくかくの如く蓄積せぬ。蓋し觀察或は記錄された歷史は恐らく歩毎に新たな照校符を齎すからである。同一過程―歸納・演繹兩者とも―は時代潮流の歷史上の一既知事實の說明及び一未知事實の豫測に略ぼ同じ狀態に用ひられるのである(4)。

事實を解釋する困難

(4) Mill, Logic, Book VI. ch. III. 參照。

然らば常に次の點を忘れてはならぬ。即ち觀察或は歷史は甲事件が乙事件と同時に或はその後に起つたことを言つてくれるかも知れぬが、甲が乙の原因であつたか否かを言ふことは出來ぬ。之は事實に基礎を置く理性のみの能くし得る所である。歷史上の或る事件が何事かを敎へると言はれる場合には、この事件が起つた際に現存してゐた一切條件は決して正式に考慮されてをらぬ。一部の條件は隱約の裡に―假へ無意識的にでなくとも―無關係のものと假定されてゐる。この假定は何等かの特定場合には正當視し得るかも知れぬが、正當視し得ないかも知れぬ。經驗を廣め探求を一層細心にすれば、この事件の歸する所と認める諸原因もそれだけではこの事件を生じ得なかつたといふことが明かになるかも知れぬ。否恐らくはこれらの原因がこの事件を妨害し、この事件はこれらの原因あ

りたるにも拘らず注意に漏れた他の諸原因によつて生じたものであるといふことが明かとなるかも知れぬのである。

この困難は英國現代の諸事件に關する近時の論爭によつて顯著となつた。これらの事件から一結論が導かれてそれが反對に會ふ場合には、常に一種の試錬を受けねばならぬ。對抗的說明が提供される。新事實が現れて來る。舊事實は檢證され新たに整理され、或る場合にはこの舊事實によつて最初求めた結論とは反對の結論が支持されることが明かにされる。

分析の困難及び分析の要は何れも增加した。之が增加したのは、如何なる二つの經濟事件も決して一切の點に於て精密に同樣でないといふ事實による。勿論二つの單純な出來事の間には濃厚な類似點があるかも知れぬ。二農場の土地貸借條項は略ぼ同一原因に支配されるかも知れぬ。仲裁局に送る二つの賃銀問題報告は大體に於て同一問題を出すかも知れぬ。併し精密な反復は極少の程度に於てさへ決して存せぬ。如何に二つの場合が略ぼ相該應してゐても、吾々はこの二つの間の相違を實際的には重要に非ずとして度外視していゝか否かを決せねばならぬ。而かも之はこの二つの場合が同一の場所と時とに關する場合に於てさへ餘り容易でないかも知れぬ。

又若し吾々が遠い過去の事實を取扱ひつゝあるならば、吾々はその間に經濟生活の全性

遠い過去から導いた即決論證の信據し難いこと

質に起り來つた諸變化を考慮せねばならぬ。今日の甲問題は歷史上に記錄された乙問題と外面的附帶事項に於て酷似してゐることもあるが、如何に酷似してゐても更に精細に檢して見ればその實質的性質の間の基本的相違を探出するといふことが在り得る。之を行ふ迄は甲の場合から乙の場合に何等の妥當な議論を導き得ないのである。

四　訓練なき常識も往々深い分析に入り得るが、不明確な原因殊に原因の原因に至つては殆んど之を發見し得ない。科學の機械（研究手段）の機能。

經濟史家の任務は多樣である

右の點は吾々をして經濟學と遠い過去の事實との關係を考察せしめる。

經濟史研究は多樣の目標を持ち、それに應じて多樣の方法を持つ。一般歷史の一分科と見れば、それは『數多の時期に於て社會の制度的骨組は如何なりしか、多樣の社會階級の構成及びその相互の關係は如何なりしか』を理解する上に吾々を助けることを目標とすることもある。又『社會的存在の物質的基礎は何であつたか、生活必要品、生活便宜品は如何に生產されてゐたか、勞働は如何なる組織によつて準備され指揮されてゐたか、かくの如く生產された貨物は如何に分配されてゐたか、この指揮と分配との上に立つ諸制度は何であつたか』その他を問ふこともある(5)。

(5) Ashley, On the Study of Economic History.

この任務はそれ自體として興味あり重要ではあるが、この任務のためには多大の分析は肝要でない。之がために要するものゝ大部分は躍動的な探求精神を有する人が供給してくれる。宗教的、道德的、知力的、審美的、政治的、社會的環境に關する知識の充滿した中で經濟史家は吾々の知識の境界を擴大し貴重な新觀念を暗示することがある。例へ彼が表面に近く浮ぶ近緣關係及び因果關係の觀察に滿足してゐる場合に於てさへさうである。

併し彼自身は何うあらうとも、彼の目標は確かにこれらの限度を越えるであらう。彼の目標は經濟史の內面的意味を發見し、慣習その他吾々がもはや自然によつて與へられ解決すべからざる終極的事實として滿足してをられぬ現象の成長、廢滅の秘密を曝露しやうとの若干企圖を含むであらう。又彼は現在の指針のために過去の事件から推論を暗示することを恐らく全然斷念するものでもない。又實に人間精神はまざまざと目前に現れる諸事件の間の因果關係の觀念に於ける空虛を嫌ふものである。單に事物を或る順序に並べ、意識的或は無意識的に『その後にあるが故にその結果なり』を暗示することによつて、歷史家は嚮導者としての責任を双肩に荷ふのである。

例へば—大英國北部に固定貨幣地代による長期土地貸借が行はれて後に、その地方の農業と住民の一般狀態との一大改善が續いた。併しこの長期土地貸借の行はれたことをもつてこの改善の唯一の原因であつたと推論する前に、—否その主要原因であつたとする場合に於てさへさうであるが—吾々は先づそれと同時に如何なる他の諸變化が起りつゝあつたか及びこの改善の如何なる部分がこれら變化の各々に關係するかを探求せねばならぬ。例へば吾々は農業生產物價格の變化及び邊境諸州保安秩序の確立の諸結果を斟酌せねばならぬ。之を斟酌するには細心と科學的方法とを要する。之を斟酌する迄は長期土地貸借制の一般傾向について信據すべき何等の推論をも導き得ない。之を斟酌した上にはてさへこの經驗から單純に今日(假りに)愛蘭の長期土地貸借制の提案を論じ得ない。吾々は先づ多樣の種類の農業生產物の地方市場、世界市場の性質の相違を斟酌し、金、銀の生產、消費に起り得る諸變化その他を斟酌せねばならぬ。土地耕作の歷史は好古的興味に滿ちてゐる。併し經濟理論の助力を借りて細心に分析し解釋する迄は、この土地耕作は今日何れかの國に於て採用すべき土地耕作の最善形式如何の問題に信據すべき光明を投ぜぬのである。卽ち一部の人は論ずる。原始社會は通例その土地を共同に保有したから土地私有は不自然な過渡的制度でなければならぬと。他の人々は同樣の確信をもつて主張する。土地私有は文明の進步と共に範圍を擴大したから今後の進步の一必要條件であると。併し歷史の中からこの題目に關する教訓を引出すには、過去の土地共同保有の諸結果を分析して、その諸結果の各々が如何なる程度迄常に同樣に作用するか、人類の習性、知識、富、社會組織の變化によつて如何なる程度迄變形されるかを發見するを要する。

經濟史家の總てが必ずしも微妙な分析を要するのではないのである

併し過去から現在の指針をたどめの嚮導きを出すには之を要する

之よりも更に興味あり教訓ある場合がある。それはギルドその他工業上及び國内交易・外國貿易上の法人・團體の行つた趣旨公開の歴史である。その趣旨公開によると彼等は大體に於て彼等の特權を公共福利のために行使したといふ。併しこの問題について完全な判決を下すには、經驗豐かな歴史家の廣い一般知識と微妙な本能とを要するのみならず、獨占・外國貿易・租稅歸着その他に關係する最も困難な分析と推理との多くのものゝ把握を要する。之から現代のための健實な指針を導く場合にはなほ更らである。

然らば若し經濟史家が世界の經濟秩序の隱れた泉を發見し過去から現在に於ける指針のために光明を求めやうと期するならば、彼は名稱或は外見の類似性によつて假裝されてゐる實質的相違及び表面的相違によつて曖昧になつてゐる實質的類似性を探出する一助となる一切の學識を用ふべきである。彼は各事件の眞正原因を選び出し各眞正原因に適宜の重みを與へ、分けても變化の遠因を探出せんと努めるべきである。

海軍史からの類同

海軍の軍事から一の類同を借りて見たい。廢用となつた要具をもつてした一海戰の細目點はその時代の一般歴史の研究者には多大の興味があるかも知れぬ。併し今日の海軍指揮官には殆んど何等の有用な指針を與へぬかも知れぬ。今日の指揮官は全然異なる戰爭材料を取扱はねばならぬ。從つてマハン Mahan 大佐がいみじくも示した通り、今日の海軍指揮官は過去の時代の戰術よりも寧ろ戰略に多くの注意を拂ふであらう。今日の指揮官は特殊海戰の出來事に多く係はらず寧ろ主要行動原理の實際的例證に多く係はるであらう。その原理とは全軍力を掌中に把持し而かもその軍力の各部分に十分の自發性を與へ、廣大な聯絡を保つて而かも迅速に集中し壓倒的軍力を傾倒し得る攻擊點を選ぶを得せしめる原理である。

同樣に一時代の一般歴史の滿ち滿ちた中にある人は一海戰の戰術について如實の繪畫を與へるかも知れぬ。この繪畫はその大體の輪廓に於て正しく、例へ時々誤つてゐても殆んど無害である。蓋しこの戰術の要具は既に廢用に歸してをり何人も恐らくかゝる戰術を模倣せぬからである。併し一戰役の戰略を理解し、過去の時代の一大將帥の實質的動機を外見的動機から殊別するには、人は自ら一個の戰略家でなければならぬ。假りに彼がその記錄する物語から今日の戰略家が學ぶべき教訓を―如何に謙遜にでも―暗示する責任を負はうとするものとする。すれば彼は今日の海軍狀態と彼が書きつゝある時代の海軍狀態との兩者を徹底的に分析しておくべき義務がある。幾多の諸國に於てこの困難な戰略問題を研究しつゝある幾多の精神者の業績はこの目的のために助力を供するものであるから、彼は如何なる助力と雖もかゝる助力を無視してはならぬのである。海軍史に於けると同樣、經濟史に於ても亦た然りである。

經濟學上に於ても戰事上の戰略と戰術との區別に相當する區別がある。この別を重視

するに至つたのは、極めて近時に至つてからであり且つ大部分は歴史學派の批評の健全な影響によつてゞある。戰術に相當するものとしては、經濟組織の外部形態及び偶然事項の中、一時的或は地方的性癖慣習、階級關係に依存するもの、個人の影響に依存するもの、或は變化し行く生產要具、生產必要に依存するものである。之に對し戰略に相當するものとしては、經濟組織の最基本的實體の中、如何なる場所に於ても人間の中に見出される欲望、活動好愛、嫌惡に主として依存するものである。これらは元より常に必ずしも形態を同じくせず、或は實體を同じくすることさへもない。併しなほこれらは永續性と普遍性との十分な分子を持つてゐるから、或る程度迄一般叙述の下におき得るものであり、一時期或は一時代の經驗は他の時期或は時代の困難に光明を投ずることがある。

この區別は經濟學上に於ける力學的類同と生物學的類同との使用の區別に似てゐる。十八世紀初頭の經濟學者は未だ之を十分に認めてゐなかつた。リカードの諸作には著しく缺けてゐる。リカードの到達した諸特定結論に—彼の研究方法中に體現されてゐる諸原理にではない—注意を注ぐ場合、これらの結論を獨斷(ドグマ)に變じて彼の時或は場所以外の時或は場所の狀態に之を粗雜に適用する場合—これらの場合には疑もなく右は殆んど無益の害である。彼の思想は鋭い鑿の如きものであつて殊に指を切り易い。何となればこの鑿はかゝる危い無器用な柄を持つてゐるからである。

一に多を見、多に一を見る

併し近代經濟學者は粗雜な表現を蒸溜し、その精素を抽出して之に加味し、獨斷を拒否しつゝも分析推理の諸原理を開展しつゝあつて、一の中に多を見出し、多の中に一を見出しつゝある。彼等は例へば地代分析の原理が今日通常地代の名をもつて呼ばれるものゝ多くに適用し得ざること、及び中世の歴史家が通常—但し不正確である—地代と記載してゐるものゝ一層多くの大部分にも適用し得ざることを學びつゝある。併しなほこの原理の適用範圍は擴大されつゝあるのであつて縮小されつゝあるのではない。蓋し各文明階段に於て一見する所全然地代の本質を有せぬと見える非常に多樣なものにも、適宜の細心の注意を拂へばこの原理を適用し得るのであつて、經濟學者は之をも同時に學びつゝあるからである。

併し如何なる戰略研究家と雖も戰術を無視し得ざるは勿論である。人間はその經濟困難と戰ふものであつて、この一々の戰の戰術の細目點を研究するには人の一生は短かきに失するであらう。さは言へ經濟戰略の廣大な問題の研究と雖も、戰術に關する深い知識及び若干の特定時代と國とに於ける人間の困難對抗の苦鬪上の戰略に關する深い知識の兩者を之に結び付けなければ恐らく無價値である。又更に各研究者は親しく觀察を行つて若干特定類の細目事項を—必ずしも出版のためではなく—自身の訓練のために研究すべきである。之は現在に關すると過去に關するとを問はず、印刷物から或は筆寫物から得る

常識と生來の機智とは深い分析に入り得る

證據を解釋し秤量する上に大いに助けとなるであらう。勿論深い思想家であり觀察に鋭い人は各々常に談話及び現行文獻から彼の時代殊に彼の近隣地に於ける經濟事實に關する知識を得つゝある。かくの如くして彼が目に見えぬ程づゝ貯へた事實は、時に或る特殊點に於て、遠い場所と時とに於ける若干種類の事實に關する一切既存記錄から蒸溜される事實よりも充實してをり徹底してゐる。併しこの點を離れても、事實―恐らくは主として自身の時代の事實―の正式の直接研究は單なる分析と『理論』との研究よりも遙かに多く眞劍な經濟學者の時間を吸收すべきであらう。尤もかゝる經濟學者は事實に比して相對的に觀念の重要性を最も高く見る人々の一人であることがあり、又新事實の蒐集は既に蒐集されてゐる事實の一層深い研究程に重要でないと考へることもある。それにしても之は今日吾々の最も切迫的な必要であり、或は人間の營む困難對抗の戰の戰術のみならず戰略を改善する上に最も助けとなるであらう。

五

この任務の多くには緻密な科學的方法よりも鋭い生來の機智と健全な輕重判斷力と多大の生活經驗とを要するは疑もなく眞である。併し他面に於てかゝる機械(研究手段)なくしては容易に果し得ぬ任務も多い。生來の本能は取扱ふ問題に關係ある考察點を迅速に

併し一切の目的には必ずしも十分深い分析に入り得ぬ

選び出し正當に結合せしめるであらう。併しそれは近親な考察點のみを選び出すであらう。それは人を表面以下に深く或は彼の個人的經驗の限度以上に遠く導くこと稀であらう。

且つ經濟學上に於ては既知原因の最明白の結果も既知結果の最明白の原因も一般に最重要の結果或は原因でないといふ事情がある。『目に映ぜぬもの』は往々『目に映ずるもの』よりも一層の研究に價する。殊に吾々が單に地方的或は一時的興味ある若干問題を取扱はずして、公共善利のために遠大な政策を樹立するに當つて指針を求める場合、或は何等か他の理由によつて直接原因に多く關せず原因の原因を取扱ふ場合に於てさうである。蓋し經驗は、既に豫想のつく通り、常識と本能とがこの任務に不十分なるを示し、企業訓練さへも當面の經驗以上の所に横はる原因の原因の探求へ常に必ずしも導いてくれぬを示し、この探求を企てゝさへもこの探求を常に必ずしもよく指導してくれぬを示すからである。之を行ふ補助として、各人は是非とも過去の數時代者によつて漸次築き上げられた思想・知識の强力な機械(研究手段)に依賴せねばならぬ。蓋し系統的科學的推理が知識生產上に演ずる役割は機械が財の生產上に演ずる役割と似てゐるからである。

科學の機械(研究手段)と物質的生產の機械と

同一動作が同樣の狀態に反復行はれる場合には、この作業を營む機械を製作するを一般に利とする。尤も細目點に非常な變化的多樣性が存する場合には機械を用ふるは不利で

の類同

あつて、財は手によつて作られねばならぬ。知識の場合も同樣である。同種の任務を同種の狀態に於て反復行ふ如き何等かの調査過程或は推理過程がある。かゝる過程が存する場合には、この過程を系統に還約し推理方法を組織し一般命題を形成し、之を用ひて事實を加工するための機械とし、この任務のために事實を動かぬやうに把持する把握機とするのが有利である。尤も經濟原因は非常に種々の狀態に於て混交してゐるため、精密な科學的推理は吾々の求める結論に向つて吾々を餘り遠く導いてくれることは稀であらう。さは言へこの推理が及ぶ限りに於てその助力を借りるを拒絶するは愚であらう。恰かも之と反對の極端に走つて、科學のみをもつて一切任務を果し得るものとし實際的本能と訓練ある常識とを用ふる餘地全然なしと推定するのが愚なると同樣である。建築家にしても、その實際的機智と審美的本能とが發達してゐなければ、その力學の知識が如何に深くとも貧弱な家屋を建てる許りであらう。之に反して力學の知識のない建築家は危險な或は空費多い建築を行ふであらう。學問のない一ブリンドリー Brindley は、如何に訓練があつても彼程に生來の機智を持たぬ人よりも若干の機械工學的作業を營むことがある。看護婦であつても本能的同情によつて患者を見る怜悧な看護婦は、學問ある醫者よりも若干の點に於てはよい助言を與へるかも知れぬ。併しなほ機械技師は分析力學の研究を怠つてはならず、醫師は生理學の研究を怠つてはならぬのである。

蓋し心性的才幹は手工的熟技と同樣之を所有する者と共に死ぬものであるが、各時代者が工業機械或は科學思考法に寄與する改良は次の時代者に讓り渡されるからである。今日はパルテノンに働いた人々以上の有能な彫刻家はなく、アリストートル以上に生來の機智を持つ思想家はないかも知れぬ。併し思想要具は物質的生產の要具と同じく累積的に發達するのである。

觀念は藝術、科學の觀念なると實際的要具に體現されたものなるとを問はず、各時代者その先行者から受繼ぐ恩惠中の最も『現實的』なものである。若し世界の物質富が破滅しても物質富を作つた觀念が保存されゝば、その物質富は速かに補充されるであらう。さりながら若し觀念が消滅して物質富が消滅しなければ、物質富は縮小して世界は貧困に歸るであらう。又單なる事實についての吾々の知識の多くが消滅して思想の建設的觀念が殘るならば、この知識の多くは速かに回復し得る。之に反して若しこの觀念が消滅すれば、世界は再び暗黑時代に入るであらう。即ち觀念の追求は事實の蒐集に比し言葉の最高の意味に於て少しも『現實的』の程度の劣るものではない。尤も獨逸學者は或る場合には事實の蒐集を適切に現實研究 Realstudium 即ち現實學校 Realschule に殊に適當な研究と呼ぶことがある。經濟學の廣大な領域中の何れかの分野には、事實の蒐集と事實を連結する觀念の分析、構成とが比例關係に於て―即ちこの特定分野の知識を增加し進步を促進するに最も適す

る比例關係に於て一結合されてゐる分野がある。かゝる分野の研究は言葉の最高の用法に於て最も『現實的』な研究である。而してこの分野が何であるかは手輕に定め得ない。細心の研究と特殊實驗とによる外ないのである。

六

經濟學の範圍の擴大する毎に利もあり害もある

各人がその性向に從つて作業し彼決定をしの限度を忘れ最善をすとなるを

經濟學は社會科學の他の如何なる分科よりも大なる進歩を遂げた。何となれば經濟學は他の如何なる分科よりも明確・精密だからである。併しその範圍の擴大する毎にこの科學的精確性の若干喪失を伴ふ。その展望範圍の擴大によつて生ずる右の損失が利益よりも大であるか小であるかの問題は、嚴正固定の原則によつて決すべきではない。

經濟學的考察を著しく重要としつゝも未だ最重要とはせぬといふ地域は卽ち討論の餘地ある地域であつて、この地域は廣大である。この地域の上に如何なる範圍迄自己の勞作を擴大すべきかは各經濟學者が當然自決すべきである。彼が自己の中心堅壘から遠く離れゝば離れる程、又少なくも若干程度迄科學的方法をもつて把握し得ないやうな生活狀態及び行爲の動機を取扱へば取扱ふ程、彼が確信をもつて語り得る程度は愈々減少するであらう。彼が主として狀態及び動機を取扱ふ場合に、この狀態・動機の發現が何等明確な標準に還約し得ない場合には、その時代及び以前の時代の國內・國外の他學者の觀察・思想からの殆んど一切の助力を斷念せねばならぬを常とする。彼は主として自身の本能と憶測とに依賴せねばならぬ。彼は個人的判斷に屬する一切の謙遜をもつて語らねばならぬ。併し社會的研究の地域中これ程に知られてをらずこれ程に知り得ない地域に遠く彷ひ入る場合に、その勞作を細心に行ひその勞作の限度を全幅的に意識してゐるならば、彼は優れた奉仕を致すに至るであらう(6)。

(6) ミケランヂェロの模倣者が彼の缺點のみを模した如く、カーライル、ラスキン及びモリス Morris は今日安價な模倣者を持ち、これら模倣者は彼等の淸高な靈感と直觀とを持つてをらぬ。

第四附錄(1)　經濟學上に於ける抽象推理の有用性

(1)　第一編第三章を見よ。

一　經濟學は演繹推理の長い連鎖を許さぬ

經濟學は演繹推理の長い連鎖に餘地を與へぬ。數理的訓練の效用の限度。

歸納は分析と演繹との助けを借りて適切な部類の事實を集め、それを整理し、分析し、それから一般叙述或は法則を導く。その上は暫く演繹が主役を勤める。演繹はこれらの一般化の或るものを相互に連結し、これらから試驗的に一層廣汎な新しい一般化卽ち法則を作り、その後は再び歸納に歸つて、この新法則を檢證し『實證』するためこれらの事實を集め配合し整理する上に主要な任務を盡す。

數理的訓練の利益

經濟學上には演繹推理の長い連鎖を容れる地のないのは明かである。如何なる經濟學者と雖もリカードさへも、之を企てなかつた。如何にも一見する所、經濟學的研究に數學公式が頻繁に用ひられるため右の反對を暗示するやうに見える。併し之を調べて見ると、この暗示が幻影であることが分る。たゞ純粹の數學者が數學的慰みの目的のために經濟學的假設を用ふる場合は恐らく例外である。蓋しこの場合には彼の任は、數理的方法に適切な素材が經濟學的研究によつて供給されるとの推定の上に立つて、數理的方法の伏能力を示すことで終るからである。彼はこの素材については全然專門的責任を帶びず、往々にしてこの素材が彼の力强い機械(研究手段)の重壓に堪へるべく如何に不十分であるかを知らずにゐる。併し數學上の訓練は助けになる。それは若干の一般關係及び若干の短かい經濟學的推理過程を明快に表現する。驚くべき簡潔・精密な言葉の使用を許すからである。この關係及び過程は元より通常の言葉で表現し得るが、數學の言葉を用ふる場合の如く輪廓の鋭さを持たない。又之よりも遙かに重要な點として、數理的方法による物理問題取扱上の經驗は經濟變化の相互的交互作用を把捉せしめ、この把捉は他の如何なる途をもつてしてもこれ程には行かない。經濟學的眞理の發見のためにする數理的方法の直接應用は近時偉大な數學者の手によつて、統計的平均と確率との研究及び相關統計表間の符合程度の測定の上に大功績を擧げた。

二　想像を自由に活動せしむべし

建設的想像は科學的勞作上の主要力である。その强さは抽象假設を開展する所に現れずして、廣大な地域に亘つて作用しつゝある現實經濟諸力の多種多樣の影響を相關せしめる所に現れる。

若し吾々が現實に對して目を閉づるならば、想像によつて純粹水晶の一建設物を作り上げてもいゝ。すればこの建設物は現實問題に側面光を投じ、吾々自身の有する如き經濟問

例へば物質的世界の存在ざるものの別世界にあるものが一思考經濟學上の世界にあるものがあり得る

題を全然有せぬ生物にとつては思考上興味あるかも知れぬ。かゝる遊戯的散歩は往々意外な點に於て暗示に富むことがあり、精神に良い訓練を與へ、その目的を明瞭に理解してゐる限りに於ては何等か良きものを生み出す如くにも見える。

例へば貨幣が經濟學上に於て支配的地位を有するは、そが努力の一目標たる結果に非ずして動機の一測度たる結果であるが、この叙述を次の點の省察によつて例解して見たい。即ち貨幣を全然動機の測度としてのみ用ふることは言はゞ一偶然事であり、恐らく吾々の世界以外の別世界にはない一偶然事である。吾々が人をして何事かを爲さしめんと欲する場合には、吾々は一般に貨幣を提供する。吾々がその人の度量或は義務の念に訴へることあるは眞である。併し之は新動機を供するのではなく、寧ろ既存の潜在動機を引出して發動せしめるのであらう。若し吾々が新動機を供せねばならぬとすれば、吾々は一般に之を行ふに何程の貨幣をもつてすれば丁度收支償ふかを考察する。元より時には、行爲の一誘因と看做されてゐる感謝或は尊敬或は名譽が新動機と見えることもある。特にそれを何等か明確な外的表明に結晶せしめ得る場合にさうである。例へば C. B. といふ稱號の文字を用ひ、或は星勳章或はガーター勳章を帶ぶる權利に結晶する如きである。かゝる榮譽は比較的稀であり且つ極めて少數の取引に關聯を持つのみである。日常生活の行爲に在る人間を支配する通常動機の測度とはならぬであらう。併し政治的責任は他の如何なる途によるよりも右のやうな名譽によつて報いられることが多い。故に吾々は政治的責任を貨幣によつて測定せずして名譽によつて測定する習性を得た。例へば吾々は、甲が一場合の如何によつて—その黨派或は國家の福利のためにした盡力はナイトの爵位で公正に報いられ之に對して乙にとつてはナイトは餘りに貧弱であつて男爵を得たと言ふのである。

なほ左のやうな別世界のあることも全く可能である。その世界に於ては何人も有形物或は一般に理解されてゐるやうな富の私有を知らない。他人の善利のために盡した一々の行爲の報償として差等表によつて公共名譽が分與される。若しこれらの名譽を何等外部の權威の干渉なくして轉々移轉し得るとすれば、恰かも貨幣が吾々の動機の力を便宜精密に測定すると同樣にこれらの名譽は動機の力を測定するに役立つかも知れぬ。かゝる世界に於ても今日の經濟理論書に酷似した經濟理論書があるかも知れぬ。尤もその書は有形物については殆んど貨幣については全然何事も言はぬであらう。

かゝる言を爲すは殆んど兒戯に類するやうに見えるかも知れぬが實はさうでない。蓋し經濟科學上顯著な動機測定と物質以外の高級な願望對象を無視する物質富の排他的尊重とが誤つて人の精神に於て結びついて聯想されるに至つたからである。經濟學の目的のためにする測度の唯一の必要條件は、その測度が何等か明確な移轉し得べきものたるべ

しといふことである。この測度が物質的形態を採るは實際から言つて便宜であるが、本質的なものではない。

三

併し眞劍な勞作に於て現はれは密接に實に追隨せねばならぬ

抽象を追求するは、それが適當な場所に限定されてゐる場合には良い事である。併し經濟學が取扱ふ人間性格緊張の廣汎性は、英蘭その他の諸國の一部經濟學者に輕視されてゐた。獨逸經濟學者は之を高調して功績を擧げた。さりながら獨逸經濟學者が大英國經濟學建設者をもつて之を無視したものと推定するは誤りであるやうである。讀者の常識(コムモン・センス)によつて補足すべき點を多く殘しておくのは大英國的の習性である。この場合にはこの控へ目が餘りに過ぎて、國內に於ても國外に於ても屢々誤解を招いた。この控へ目により、人は經濟學の基礎をもつて眞實然るよりも狹く且つ現實生活狀態に密接に觸れてをらぬと推定するに至つた。

獨逸學者は經濟動機の廣汎性を唱へて功績を擧げた

卽ちミルの叙述—『政治的經濟學は單に富の獲得・消費に沒頭する人間を考察する』(Essays, p. 138 更に Logic, Bk. VI. ch. IX, §3)—が重大視された。併し彼がそこでは經濟問題の抽象的取扱に關聯して言つてゐることは忘れられてゐた。彼は實に一度この抽象的取扱を考へてゐたが、遂に之を實行せず、『政治的經濟學、附、社會哲學への若干應用』を書くことにしたのである。なほ彼が續いて次の如く言つてゐることも亦た忘れられてゐた—卽ち『單なる富の願望以外何等の衝動の間接影響をも受けず遠い影響をも受けぬやうな人間生活上の行動は恐らく存せぬといふのである。又彼の經濟問題の取扱が絕えず富の願望以外の多くの動機を考慮してゐることも忘れられてゐる(上記第二附錄七を見よ)。さりながら經濟動機に關する彼の論究は實體に於ても方法に於ても獨逸の同時代者、殊に著しくはヘルマンの論究に比して遜色がある。購入すべからず測定すべからざる快樂が時の異なるに從つて相違し文明進歩と共に增加する傾があるとの有益な所論はクニース Knies, Politische Oekonomie, III. 3 にある。英吉利讀者は Syme, Outlines of an Industrial Science を參照せられるもいゝ。

ワーグナーの動機分類

茲にワーグナーの記念塔的著書の第三版にある經濟動機(Motive im wirtschaftlichen Handeln)分析の主要項目を擧げておきたい。彼はこの動機を利己的と利他的とに分つ。前者には四ある。その第一は作用の上に於て最も中絕的ならざるものであつて、自身の經濟利益の追求と自身の經濟必要の恐怖とである。第二は刑罰の恐怖及び報償の希望である。第三類は名譽感情、認知追求(Geltungsstreben)であつて、他人の道德的是認の願望及び恥辱・輕蔑の恐怖を含む。利己的動機の最後のものは職業探求・活動快樂と作業自體及び作業周圍の快樂であつて、『追求快樂』を含む。利他的動機は『道德的行爲を爲さしめる內面的命令の衝迫力(Trieb)、義務感情の快樂、及び自身の內面的譴責卽ち良心の呵責の恐怖である。こ

の動機はその純粹形態に於ては「無上命令」として現れる。人は自らの精神の中に行爲樣式の命令を感じこの命令を正當と感ずるが故に之に從ふ……命令服從は疑もなく規則的に快樂感(Lustgefühle)に結び付いてゐる。さてこれらの感情は無上命令と同じ强さをもつて、或は之よりも强く、吾々を驅つて行爲或は無行爲に至らしめ、或は至らしめるに與ることがある。否往々さうである。その限りに於てはこの動機も亦た利己的分子を包有するのであつて、少なくも一つに融合してゐるのである』。

第五附錄(1)　資本の定義

(1) 上記第二編第四章八註(8)一六九頁(原著八二頁)を見よ。

一　營利資本は必ずしも勞働に雇傭を與へる一切の富を包容せぬ。

營利資本と使用上の困難は既に說いた

第二編第四章に說いた通り、經濟學者は日常業務に於ける資本卽ち營利資本といふ用語の使用については既成の慣習に從ふ外ない。さりながらかゝる使用法の不利益は大であり明瞭である。例へばこの用法によれば、ヨット建造者に屬するヨットは資本と見さるを得ないが彼に屬する馬車は資本と見るを得ない。從つて彼が馬車を一年決めで雇用してゐる場合に之をやめて、馬車を賃貸してゐた馬車製造業者に一のヨットを賣り自用のために一の馬車を買ふとする。その結果國內の全部資本高は一のヨットと一の馬車とだけ減少することにならう。この場合には何物も破壞されてをらず又同じ貯蓄の產物が殘ることになるが、而かもそれ自體は關係個人及び社會共同體に從前同樣の福利を產出し、恐らくそれ以上の福利をさへ產出するのである。

營利資本は必ずしも勞働雇傭を助

又資本が富の他の諸形態と異なるは勞働に雇傭を與へる力の優れてゐることにありとする觀念もあるが吾々はこの觀念をも亦た玆に用ふるを得ない。蓋し事實の問題として

長する富の一切を包容せぬ

ヨット及び馬車が取引者の手にあつて資本として計上されてゐる場合には、ヨット及び馬車が私有者の手にあつて資本として計上されてゐない場合に比して、一定量のヨット快走及び乘車が勞働に與へる雇傭は少ないのである。私人の臺所(そこでは何物も資本と計上されてゐない)に代ふるに營業的料理店及びパン燒商(そこでは一切要具は資本と計上されてゐる)を代用すれば、勞働雇傭は增加せずして反つて減少するであらう。職業的雇主の下に於ては勞働者は恐らく一層の人身自由を持つかも知れぬ。併し勞働者が散漫な私人的雇主の管治の下にある場合に比すれば、勞働者の物質的快適と賃銀とはその行ふ作業の割合に少ないことは殆んど確かである。

右の如き用語の用法の流行した原因

併しこれらの諸短所は一般に看過されて來た。二三の原因が合して右の如き用語の用法を流行せしむるに至つたのである。これら原因の一は、私人的雇主とその被傭者との關係は雇主對被傭者の爭鬪或は通常言ふ資本對勞働の爭鬪上の戰略的戰術的運動に殆んど入り來らぬことにある。この點はカール・マルクス Karl Marx とその追隨者とによつて高調されて來た。彼等は自ら言明して資本の定義をこの點に繫らしめた。彼等の主張によると、一人(或は一國の人々)に所有されて他者の福利のための物の生產に使用される生產手段のみが資本である。この物を生產するには、一般に第三者の勞働の雇用といふ手段による。而かも前者が他者を掠奪し或は搾取する機會を有するが如き狀態に於て行はれる。

第二に資本といふ用語の右の如き用法は貨幣市場に於ても勞働市場に於ても便宜である。營利資本使用の好途を有する場合には、何人も自ら支配する營利資本を增加するために借入を行ふを躊躇しない。之を行ふには、その家具或は私用馬車を抵當に入れるよりも日常業務取引の過程に於て一層容易且つ規則的に自身の營利資本を抵當に入れ得る。最後に、人はその營利資本勘定を細心に計上する。人は減價を當然事として斟酌し、之によつてその資產高の減損を防ぐ。勿論一年決めで馬車を雇用してゐた人は、雇賃として拂つてゐたよりも非常に低い利率を生ずる鐵道株の賣上金によつてこの馬車を購入し得る。若し彼が馬車の磨滅する迄その年所得を蓄積するならば、彼は新しい一の馬車を買つてなほ餘りあるであらうし、かくて彼の全部資本高はこの變化によつて增加することゝなるであらう。併し彼が之を行はないといふ蓋然(チヤンス)もある。故にその馬車が取引者に所有されてゐる限り、彼はその日常業務過程に於てこの馬車に代るものを備へたのである。

社會資本限定上の差異は思ふ程の

二　二つの本質的屬性—期望性と生產性と—の相對的重要性に關する論爭は無益。

次に社會的視點から見る資本の定義に移らう。既に指摘した通り、嚴正に論理的な唯一の立場は經濟學の數理的改譯を試みる大多數の學者の採つた立場である。それによれば

『社會資本』と『社會富』とは範圍を同じくする。尤もかゝる態度は彼等から一の有用な用語を奪つてはゐる。併し一學者が出立點に於て如何なる定義を採るにもせよ、彼は自らその定義に包容せしめる種々の分子が自ら取扱ふべき逐次の諸問題中に種々の狀態に於て入り來るを知るのである。從つて若し彼がその定義をもつて精確を期するならば、資本の各分子が問題とする論點に對して有する關係を說明して補足せざるを得ない。この說明は實質上他の諸學者の說明と非常に似てゐる。卽ち終極に於て一般的收斂（コンヴァージェンス）があり、讀者は如何なる徑路から進んでも略ぼ同じ結論に到達する。尤も形式と言葉との相違の下に橫はる實質上の統一性を認めるには元より少しく煩勞を要する。出立點に於ける放散（ディヴァージェンス）は思ふ程の弊害ではない。

更にこれらの言葉の上の相違があるにも拘らず、數代の經濟學者及び多くの諸國の經濟學者の資本定義には音調上の連續性がある。一部の學者が資本の『生產性』を力說し一部の學者が『期望性』を力說したのは眞である。又この二用語が何れも完全に精確なものでなく或は固定不動の分界線を示してをらぬも眞である。併しよしこれらの缺陷が精確な分類のためには致命的であるとしても、それは二次的重要性を持つ事柄に過ぎない。人間行爲に關する事物は如何なる科學的原理をもつてしても決して精確に分類し得るものではない。警官或は輸入稅徵收官の指導のためには分類し得る事物について精密な表を作つて

富を一生產要素と見る場合には吾々は資本といふ用語の使用につい て傳統に從ふ

混亂を生ぜぬ

もいゝ。併しかゝる表は明らさまに人爲的である。吾々が最も細心に保存すべきは經濟學的傳統の文字に非ずして精神である。第二編第四章末に暗示した通り、明發な學者は決して生産性の面或は期望性の面の何れをも考慮外に置きはしなかつた。併し一部の學者はその一面を一層詳述し一部の學者はその他面を詳述し、他方何れの面に於ても明確な區分線を引くことの困難なのが分つて來た。

然らば次の資本概念を見やう。それは人間の努力・犧牲の結果たる保有物であつて現在福利のために用ひられず主として未來福利のために用ひられるものとしての資本の概念である。この概念そのものは明確である。併し之を用ひても明確な分類は出來ぬ。恰かも長さの概念が明確であつても、長い壁と短い壁とを區別するには任意的原則による外ないと同じである。野蠻人が木の枝を集めて一夜を凌ぐ場合には若干の期望性を示す。彼が柱と毛皮とでテントを作る場合には一層の期望性を示し、木小屋を作る場合には更に著しい。文明人が木造の小家屋を廢して煉瓦或は石造の家屋を用ふる場合には更に多く期望性を示す。現在滿足のためにせず將來滿足に對する大願望によつて生産される物を區別するには何處でも任意の處に線を引くことが出來る。併しその線は人爲的であり不安定である。この線を求めた者は傾斜平面に立つてゐたのである。一切の蓄積富を資本に包括するに至る迄は安定な靜止點に達しなかつたのである。

將來に對する豫備として見る社會資本

この論理的結果に直面したのは多くの佛國經濟學者である。彼等はフィジオクラットの定めた方向を追隨し、資本といふ用語をアダム・スミス及びその直系追隨者が用ひた資財Stockといふ言葉の意味に用ひて、一切の蓄積富(valeurs accumulées)卽ち消費以上の生產超過高の一切結果を包括せしめた。尤も近年に至つて彼等もこの用語を狹義の英吉利的意味に用ふる明白な傾向を示し來つたが、同時に獨逸及び英蘭の最深の思想家の一部には之よりも廣義な古い佛國的定義に向はんとする顯著な運動がある。殊にテュールゴーと同樣に數理的思考法に傾いた著述家に於て著しかつた。その內の秀でた人々はヘルマン、ジェブンス、ワルラス Walras パレート Pareto 教授フィシアー Fisher 教授である。フィシアー教授の諸述作は豐富な暗示に富む卓見を含み、この用語の包括的用法に贊するものである。抽象的・數理的見地から見れば、教授の地位は爭ふべからざるものである。併し教授は現實的議論を市場地の言葉と接觸せしめる必要を餘りに輕視し、『複雜な事物についての多樣の意味を少數語數を固定的に用ひて表』さうとするに對するバヂォットの警戒を無視するものゝやうである(2)

(2) 上記第二編第一章三註(3)一〇五頁(原著五二頁註を見よ

(ルマン(Stautswirthschaftliche Untersuchungen, chs. III and V)は、資本をもつて『永續的滿足源泉にして交換價値を持つ』財から成るものと言つた。ワルラス(Éléments d' Économie Politique,

p.197)は資本を次の如く定義する。資本は『全然消費されざるか或は徐々にのみ消費される一切種類の社會富である。使用に當り最初の使用に堪へて殘存する有限量の一切利用である。一言で言へば一回以上使用し得る物である。一の家屋、一個の家具の如きである』。

クニースは資本を定義して『未來需要の滿足に何時でも用ひ得べき財の現保有量とした。又ニコルソン教授は言つた―『アダム・スミスが暗示してクニースが開展した思想方向は次の結果に導く。即ち資本は未來必要の―直接・間接の―滿足のために保存される富である』。併しこの全句、殊に『保存される』といふ句は明確を缺き、問題の困難を克服せずして之を回避する如くに見える。

生産手段として見る資本、先づ最初の勞働の補扶持並びに補助として

三

英蘭に於けると他の諸國に於けると問はず、資本を嚴格に定義せんとする企圖の大多數は主として資本の生産性を眼目とし、その期望性を比較的輕視した。これらの企圖は社會資本をもつて營利手段(Erwerbskapital)とし或は生産要件保有高(Produktionsmittel-vorrath)と見た。併しこの一般概念は樣々に取扱はれてゐた。

英吉利の古い傳統によれば、資本は生産上に於て勞働を補助し或は扶持する物から成る。或は更に近年になつて說かれてゐる通り、これなければ生産は同樣の能率をもつて行はれ

得ぬといふ物であつて而かも自由(無償)の自然恩惠たらざる物から成る。既に述べた消費資本と補助資本との區別はこの見地から立てたものである。

この資本觀は勞働市場の情況によつて暗示されたものであるが、決して完全に一貫してゐなかつた。蓋し雇主が直接間接にその被傭者の作業の對價として豫備する一切物—賃銀資本 wage capital 或は報償資本 remuneratory capital と呼ばれてゐる物—を資本として包括するものとされてゐるからである。併しなほ雇主自身の扶持或は建築技師機械技師その他の自由職業者の扶持に必要な物を包括するものとはされてゐない。併し一貫するためにはこの資本觀は一切作業者階級の能率必要品を包括すべきであり、又筋肉勞働階級並びにその以外の作業者の奢侈品を除外すべきであつた。さりながら若しこの資本觀をこの論理的結論に迄押し詰めたとしたらば、それは雇主被傭者間の關係に關する論究に於て左迄重大な役目を盡さなかつたであらう(3)。

(3) アダム・スミスの英吉利追隨者の採つた主要な資本定義中には次の如きものがある。リカードは言つた—『資本とは一國の富の中、生産に用ひられ且つ勞働效果を生ずるに必要な食物・衣服・道具・原料・機械等から成る部分である』。マルサスは言つた—『資本とは一國資産高の中、富の生産・分配上に於て利益せんために保持され或は使用される部分である』。シーニオルは言つた—『資本は人間努力の結果たる富の中、富の生産或は分配に用ひられる部分である』。ジョン・ステュアート・ミルは言つた—『資本が生産上に盡す所は、作業のために要する庇屋・保護・道具・材料を與へ食物支給その他の途によつてその過程中勞働者を支持することにある。この用途のために定められた物は何物でも皆資本である』。吾々はなほ所謂賃銀基金說に關聯してこの資本概念を再論するであらう。(第六編)第十附錄を見よ。

ヘルド Held が言つた通り、十九世紀初頭に顯著だつた諸實際問題は右のやうな資本概念を暗示した。人々は爭つて、勞働階級の厚生は雇傭・扶持手段の豫備高に依存する旨を主張し、保護制度と舊救貧法の無法の下に勞働階級のため人爲的に雇傭を與へんとする企圖の危險を高調した。ヘルドの見地は非常な明敏をもつてキアナンの暗示と興味とに富む『生産と分配』Cannan, Production and Distribution, 1776-1848 に開展された。尤も古の經濟學者の言は彼の下す解釋以外に一層條理ある解釋を下し得るやうに思ふ。

第二に勞働の扶持たらせずしてその補助としての

さりながら一部の諸國殊に獨逸及び墺太利には、(社會的見地からの)資本を補助資本或は要具資本に限る傾向が幾分ある。その說によると、生産と消費との對照を明白にしておくには、直接に消費に入る物は何物と雖も生産手段と見るべからずといふ。併し何故に一物を二重の可能力あるものとして見てならぬかの理由が十分でない觀がある(4)。

(4) 之と同じ議論であり且つこの全題目の困難についての優れた議論についてはワ

ーグナー(Grundlegung, Ed. 3, pp. 315-6)を見よ。

更にその說によると、直接に人に奉仕せず人の使用物の製作上に盡す役目を通じて人に奉仕する物は緊密な一部類を成してゐる。何となればこれらの物の價値はその助力を受けて生產される物の價値から派生するからである。この部類のために一の名稱を與へるは大いに推すべきことである。併し資本がこの部類に適當な名稱たるや否やには疑問の餘地があり、なほこの部類が一見して思ふ程緊密なりや否やにも亦た疑問の餘地がある。

卽ち吾々は要具財を定義して、電軍線その他對人奉仕から價値を派生　來る物を包括せしめていゝ。或は生產的勞働といふ語句の舊用法に倣つて、正しくは直接に一物質的生產物に體現される作業を爲す物のみを要具財とすべしと主張してもいゝ。前の定義はかゝる用語の用法を前節に論じた用法に可成り近づかしめるものであつて、同樣に曖昧の誘りを免れぬ。後の定義は之よりは少しく明確である。併し自然が何等の區別を立てゝゐない所に人爲的區別を立てるものであり、生產的勞働の舊定義と同じく科學的目的には不適當のやうである。

結論を下す—抽象的見地から見ればフィシアー教授その他が推す佛國的定義に匹敵するものはない。人の上着は過去の努力、犧牲の生產物であり彼に未來充足を備へる一手段として蓄藏されたものであつて、工場と異なる所はない。他面兩者とも直接に雨露を凌ぐ具となる。又若し現實的(リアリスティック)經濟學を市場地に接觸せしめる如き定義を求めるとならば、市場地に於て資本と看做されつゝ『直接』生產物の範圍內に入り來らぬ物の總體量を細心に考慮する要がある。疑問ある場合にはこの方針を採るをよしとする。この方針は最も傳統に適つてゐる。吾々が上述の如く企業的見地及び社會的見地から二重の資本定義を採用するに至つたのは右の諸點を考察したのによる(5)。

(5)　第二編第四章一・五を見よ。資本の生產性と資本の需要との關聯及びその期望性とその供給との關聯は既に永い間人の心の中に潛在してゐた。たゞ他の考察によつて著しく弱められてゐた。これらの考察は今となつては多く誤解に基くものゝやうである。一部の學者は供給側を力說し、一部の學者は需要側を力說した。併し兩者の間の差は力說點の差異以上に餘り出てゐない。資本の生產性を力說した學者も人間が將來のために現在を犧牲とし貯蓄せんとする意欲を無視しなかつた。他面に於てこの延期に伴ふ犧牲の本質・程度に主として考を向けてゐた學者も、生產要具保有量が人類の欲望滿足力を著しく增加する事實を明かな事實と認めてゐたのである。要するにボエーム・バーヂルク教授は資本及び利子についての『素朴生產力理論』『使用理論』等を說明してゐるが、古の學者自身既にこの說明をもつて彼等の種々の立場を不偏不黨に完全に表すものとしては受容しなかつたであらう。又同教授は明快な一貫的な定義を見出す上にも成功しなかつたやうである。教授は言ふ

―『社會資本とは後の生産に奉仕すべく運命づけられた生産物の一部類である。簡單に言へば中間生産物の一部類である』。教授は『享樂或は教育或は教養等の何等かの目的のために直接奉仕する住宅その他の種類の建築物』を正式に除外してゐる（第一編第六章）。一貫するためには、教授はホテル・電車線・客船・乘客列車その他をも除外せねばならぬ。恐らく私人住宅に電燈を供する工場施設さへも除外せねばならぬ。併し之では資本概念から一切の實際的興味を奪ふに似てゐる。一方に電車を包括しながら他面に公開劇場を除外する十分な理由があるならば、この理由によつて手織物の製作に從事する製作場を含めてレース製作に用ひられる製作所を除外してならぬといふ理由はないやうである。この反對に對する答へとして、教授の―完全な條理をもつて―主張する所によれば、總て經濟學上の分類は二つの種類の間に境界線の存在を許しそこに部分的にはこの二種類の何れにも屬する物を入れるやうでなければならぬ。併し彼の定義に對する反對は、この境界線が線内の面積に比して相對的に廣過ぎること、この定義が市場地の用法と甚だ矛盾すること、及び而かもなほ佛國的定義による場合の如くに完全に一貫した密著的か抽象的觀念を體現せぬことと等の點にあるのである。

數學附錄

註解一　（一九三頁、原著九三頁―第三編第三章一註(2)）　限界利用遞減法則は次の如く言ひ表していゝ―一貨物の x 量が一定の時に於ける一定の人にとつて有する全部利用を u とすれば限界利用は $\frac{du}{dx}\delta x$ によつて測定され、$\frac{du}{dx}$ は限界利用度 marginal degree of utility を測定する。ジェヴンスその他の著述家は『最終利用』Final utility を用ひてジェヴンスが他の場合に最終利用度 Final degree of utility と呼ぶものを指示してゐる。何れの表現法が便宜であるかについては疑問の餘地がある。その決定には原理上の問題は含まれてゐない。本文中に掲げた制約に從つて、$\frac{d^2u}{dx^2}$ は常に負量である。

註解二　（一九八頁、原著九六頁―第三編第三章四註(5)）　或る時に於て或る人の處分し得る貨幣即ち一般購買力の量を m とし、μ は彼にとつてのその全部利用を表すとすれば、$\frac{d\mu}{dm}$ は彼にとつての貨幣の限界利用度を表す。

貨物が彼に全部快樂 u を與へ、彼がこの貨物の x 量の對價として丁度支拂はんと欲する價格を p とすれば、

$$\frac{d\mu}{dm}\Delta p=\Delta u \quad 及び \quad \frac{d\mu}{dm}\frac{dp}{dx}=\frac{du}{dx}.$$

他の一貨物が彼に全部快樂u'を與へ、彼がこの貨物のx'量の對價として丁度支拂はんと欲する價格をp'とすれば、

$$\frac{du}{dm}\cdot\frac{dp'}{dx'}=\frac{du'}{dx'}$$

從つて

$$\frac{dp}{dx}:\frac{dp'}{dx'}=\frac{du}{dx}:\frac{du'}{dx'}$$

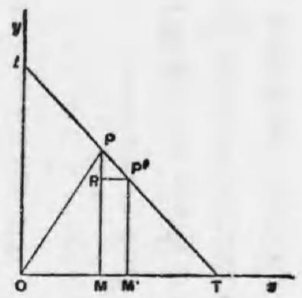
（ジェヴォンスの交換理論についての章一五一頁參照）。

彼の資力の各增加は彼にとつての貨幣の限界利用度を減ぜしめる。即ち$\frac{d^2u}{dm^2}$は常に負量である。

從つて一貨物のx量の彼にとつての限界利用が不變なる限り、彼の資力の增加は$\frac{du}{dx}\div\frac{du}{dm}$を增加せしめる。即ち彼が該貨物の供給增加分の對價として支拂はんと欲する比率を增加せしめる。$\frac{dp}{dx}$はmu及びxの一函數と見ていゝ。すれば$\frac{dp}{dmdx}$は常に負量となる。勿論$\frac{dp}{dudx}$は常に正量である。

註解三　（二一四頁原著一〇三頁—第三編第四章一註（1））　PP′を需要曲線上の續次點とし、PRMをOxに垂直に引きPP′をしてOx及びOyをそれぞれT及びtに於て切らしめる。よつてP′Rは需要增加量であつて、貨物一單位當りの價格の減少PRに該應する。

すればPに於ける彈力性は



$$\frac{P'R}{OM}\div\frac{PR}{PM}\text{ 即ち }\frac{P'M}{PR}\times\frac{PM}{OM}\text{ 即ち }\frac{TM}{PM}\times\frac{PM}{OM}$$

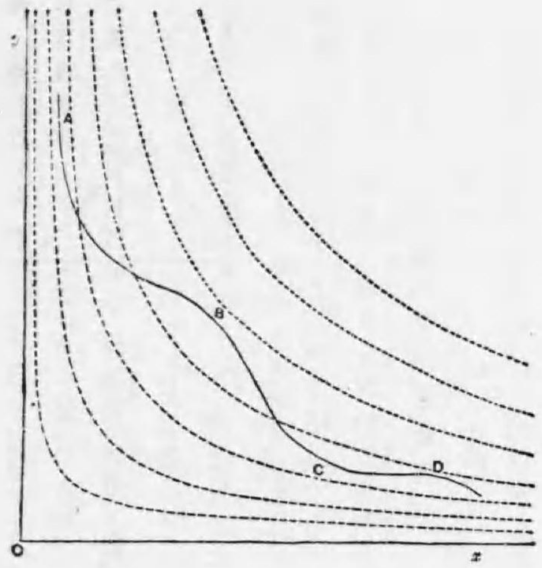
$$\text{即ち }\frac{TM}{OM}\text{ 或は }\frac{PT}{Pt}$$

によつて測定される。PとP′との距離を無限に縮小すれば、PP′は切線となる。即ち二一五頁（原著一〇三頁）に陳べた命題は立證される。

OxとOyとに平行する距離は一定の目盛りによつて測定してある。この目盛りを相互關聯して變化しても、彈力性の測度の變化し得ないのは先天的に明白である。併しこの結果の幾何學的證明は投影法によつて容易になし得る。他方分析的にも明かである。即ち曲線$y=f(x)$を新しい目盛りによつて引けば、この曲線の方程式は$dh=f(pq)$となり、pとqとは不變量であつて、彈力性の測度の分析的表現たる$\frac{1}{x}+\frac{1}{dy}$はその値を變じないのである。

若し需要彈力性が該貨物の一切價格について標準單位に等しいとすれば、價格の如何なる低落も購入量の比例的增加を來すであらうし、從つて購入者が該貨物のために出す全部支出に變化を生ぜぬであらう。從つてかゝる需要は不變支出需要 constant outlay demand と稱していゝ。之を表す曲線は言はゞ不變支出曲線 constant outlay curve とも言ふべきも

のであつて、それはOxとOyとを漸近線とする直角双曲線である。かゝる曲線の一連は左圖の點曲線が之を表してゐる。

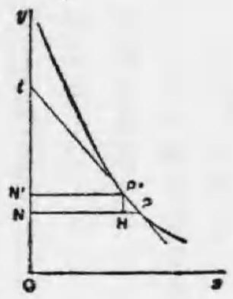


これらの曲線に目を慣らしておくのはやゝ利益がある。慣れてゐれば、一需要曲線を見た場合に、或る點をとつて、この需要曲線とこの點を通る一不變支出曲線の部分とを比較し、前者がこの點に於ける垂直線に後者よりも大なる角度をもつて傾くか或は小なる角度をもつて傾くかを直ちに言ひ得るのである。不變支出曲線を薄い紙の上に寫して、この紙を右需要曲線の上に重ねれば一層精確となるであらう。

この手段によつて例へば次の點が直ちに分る。即ち上圖の需要曲線はABCDの諸點の各々に於て略ぼ一に等しい彈力性を表してゐる。AとBとの間更にCとDとの間に於ては一以上の彈力性を表し、他方BとCとの間に於ては一以下の彈力性を表してゐる。一貨物について何等かの特定形狀の一需要曲線を引くに當つては暗默の裡に該貨物需要の性質についての假定が籠つてゐるが右種の練習はこの假定の本質の發見を容易ならしめるものであつて、蓋然的ならざる假定を無意識に導入するに對して警戒となる。

各點に於てuに等しい彈力性を表す需要曲線の一般方程式は $\frac{dx}{x}+n\frac{dy}{y}=0$ 即ち $xy^n=C$ である。

なほかゝる曲線にあつては $\frac{dx}{dy}=-\frac{C}{y^{n+1}}$ なることは注意に價する。即ち價格の小低落の結果として需要量の增加する割合は價格の第$(n+1)$冪と逆に變化する。不變支出曲線の場合には、それは價格の平方に逆に變化する。或はこの場合には同じ意味になるが、量の平方と同方向に變化する。



註解四　(二三〇頁、原著一一〇頁—第三編第四章五註(8))

時間の經過はOy上を下に向つて測定し、記錄する量はOyとの距離によつて測定する。すればP'とPとは該量の增大を畫く曲線上の近接點であつて、一小時間單位$N'N$內の增加率は

$$\frac{PH}{P'N'}=\frac{PH}{P'H}\cdot\frac{P'H}{P'N'}=\frac{PN}{N't}\cdot\frac{P'H}{P'N'}=\frac{P'H}{N't}$$

である。何故かと言へばPNとP′N′とは極限に於ては等しいからである。

時の單位として一年を取れば、年增加率はNtの表す年數の逆數によつて表されることが分る。

Ntが該曲線上の一切點について一不變量cに等しければ、增加率は不變量となり$\frac{1}{c}$に等しい。この場合にはxの總ての値について $-x\frac{dy}{dx}=c$ である。卽ち該曲線の方程式は $y=a-c\log x$ である。

註解五　（二五四頁、原著一二三頁―第三編第五章四註(5)）　本文中に明かにした通り、未來快樂割引率は個人によつて非常に相違する。一現在快樂と一未來快樂とについて、後者が到來した時に享受者にとつて前者と等量となり兩者正に平衡するには、右現在快樂に年利子を加へねばならぬが、この年利率をrとする。すればrは甲にとつては五十パーセントであることもあり、或は二百パーセントでさへあることもあり、之に對して隣人乙にとつては負量である。且つ快樂には切迫的なものと然らざるものとがある。或人が未來快樂を不規則、無思慮に割引くことさへも思考し得る。彼は一快樂を二年間延期しても一年延期しても何うでもいゝと思ふこともあり、或はその他面に於て長期の延期には實に非常に猛烈に反對しながら短期の延期には殆んど少しも反對せぬこともある。かゝる不規則性が頻發するか否かについてはやゝ意見の相違がある。この問題は容易に決定し得ない。

蓋し一快樂の評定は純粹に主觀的であるから、かゝる不規則性が起つても之を探出することは容易でないからである。かゝる不規則性の存せぬ場合には、割引率は時といふ各分子について同一であらう。或は同じ事を言ひ換へれば、割引率は指數法則に從ふであらう。又一快樂の未來量をhとし、その快樂の蓋然性をpとし、その快樂が起り來るものならばtといふ時に起り來るものとし、又 $R=1+r$ とすれば、この快樂の現在値は phR^{-t} である。さりながらこの結果は快樂學 Hedonics に屬するものであつて經濟學に當然屬するものでないのを心に留めておかねばならぬ。

右と同じ假設の上になほ論究を進めて次のやうに言つていゝ。卽ち或る人が(假りに)ビアノの所有から時間Δt内に一幸福分子Δhを收める場合に、この蓋然性をϖとする。すれば彼にとつてのビアノの現在値は $\int_0^T \varpi R^{-\frac{dh}{dt}t}dt$ である。若し何程時が隔つてゐてもこの事件から生ずる幸福を一切包括せしむべきものとすれば $T=\infty$ としなければならぬ。若し快樂源泉がベンタムの辭句で言ふ『不純』impure なものならば、$\frac{dh}{dt}$ は恐らくtの或る値について負量となるであらう。勿論積分の全値は負量となるであらう。

註解六　（二七五、八頁、原著一三二、三―第三編第六章四註(8)(9)）　yを價格とし、この價格に於て一貨物のx量が一定市場に於て購入者を見出し得るものとし、$y=f(x)$ をその需要曲線の方程式とすれば、この貨物の全部利用は $\int_0^x f(x)dx$ によつて測定される。この場合a

は消費量である。

さりながらこの貨物のb量が生存に必要であるとあれば、$f(x)$はbより小なるxの値については無限大とならう。或は少なくも不確定に大となるであらう。從つて吾々は生命を既定視して、その貨物の供給部分中、絶對必要品に超過する部分の全部利用を分離して評定せねばならぬ。それは勿論$\int_b^x f(x)dx$である。

同じ要請的欲望を滿す貨物が二三あり、例へば水と牛乳とが何れも渴を癒すとする。この場合には必要供給が最安價な物からのみ來ると假定する單純な考案を採つても、日常生活狀態に於ては左迄大なる誤差が入つて來ぬことが分るであらう。

注意すべきは、消費者餘剩の論究に於て吾々が個人購入者にとつての貨幣の限　利用を終始同一であると假定してゐることである。嚴密に言ふと吾々は次の事實を考慮せねばならぬ。即ち彼が茶に費す高を少なくすれば、彼にとつての貨幣の限界利用は現にあるよりも小となり、彼は現在彼に少しも消費者地代を與へぬ價格に於て他の諸物を買つて消費者餘剩の一分子を得ることになるといふ事實である。併しこれら消費者地代の變化は微量の二次であるから)次の假定の下に無視していゝ。その假定といふは、彼が何等かの物例へば茶に投ずる經費は彼の全經費の極小部分に過ぎぬとの假定であつて、この假定は吾々の全推理の基礎に横はつてゐる。(第五編第二章三參照)。若し何等かの理由によつて茶のためにする彼の經費が彼にとつての貨幣の價値に及ぼす影響を考慮することが望ましいならば、右の積分の內の$f(x)$に$xf(x)$の函數を乘ずるを必要とするのみである。この$xf(x)$(即ち彼が既に茶に費した量)の函數は、彼の貨幣保有量がこの量だけ減少した場合に貨幣が彼にとつて有する限界利用を表すものである。

註解七　(二八〇頁原著一三四頁—第三編第六章六註(10))　即ちa_1 a_2 a_3……を數多の貨物の消費量とし、その內b_1 b_2 b_3……を生存必要量とし、$y=f_1(x)$, $y=f_2(x)$, $y=f_3(x)$……をそれぞれの需要曲線の方程式とし、富の分配上の一切不平等を無視していゝとする。すれば所得(生活維持資料は既定視して)の全部利用は$M\int_b^x f(x)dx$によつて表していゝ。但し同一欲望を滿して互に競爭品たる一切物を一共通需要曲線に合體する考案を見出すことが出來、又相補的に奉仕を致す諸物(第五編第六章を見よ)の各部類についても之を爲すことが出來る場合に於てゞある。併し之は出來ない。從つて右の公式は單なる一般表現であつて實際的應用は少しもない。二七三頁註(7)(原著一三一·二頁脚註)及び註解一四の後半を見よ)。

註解八　(二八〇頁原著一三五頁—第三編第六章六註(11))　或る人が所得xから收める幸福をyとし、ベルヌーイに從つて彼が所得の一パーセントの增加から收める增加幸福はその所得の如何を問はず同じであるとすれば、$x\frac{dy}{dx}=K$ 及び $\therefore y=K\log x+C$ を得る。この場合K及びCは不變量である。更にベルヌーイに從ひ、最低 barest 生活必要品を供する所

得をaとし、所得がa以下に降るときは苦痛は快樂を超過し、所得がaに等しいときは苦痛は快樂と平衡すると假定する。すれば右の方程式は $y=K\log\frac{x}{a}$ となる。勿論Kもaも共に個人の氣分・健康・習性・社會的周圍によつて同じくない。ラプラース Laplace はxに肉體的幸福 fortune physique の名を與へ、yに精神的幸福 fortune morale の名を與へてゐる。

ベルヌーイ自身はx及びaをもつて所得を表さず寧ろ財産の或る量を表すものと考へてゐたやうである。併し財産が生命を支持すべき期間の長さについて何等かの諒解なくしては、即ち實質的に財産を所得として取扱はずしては、吾々は生活必要たる財産を評定し得ない。

恐らくベルヌーイ以後最も注意を引いた推測は、クレーマー Oramer の暗示であつて、それによると富の與へる快樂は富の量の平方根に從つて變ずると見ていゝ。

註解九　(二八一頁、原著一三五頁―第三編第六章六註(11))　公正な賭博が經濟的過誤であるとの論は、一般にベルヌーイの假設或はその他若干の確定的な假設に基いてゐる。併しこの論は次の假定を下せばいゝのであつて、それ以上の假定を少しも要せぬものである。即ち第一に賭博の快樂を無視していゝこと、第二にxに等しい富から收める快樂を$\phi(x)$とする場合に$\phi''x$がxの一切の値について負量なることこれである。

何故かなれば今、一特定事件の起る蓋然(チャンス)をpとし或る人がそれが起るであらうとして$(1-p)y$ 對 py の公正な賭をすると推定する。かくすることによつて彼は幸福の期待を $\phi(x)$ から

$$p\phi\{x+(1-p)y\}+(1-p)\phi(x-py)$$

に變ずる。之をテーラー定理によつて開展すると

$$\phi(x)+\frac{1}{2}p(1-p)^2y^2\phi''\{x+\theta(1-p)y\}+\frac{1}{2}p^2(1-p)y^2\phi''(x-\theta py)$$

となる。$\phi''(x)$はxの一切の値について負量であると假定してあるから、右は常に$\phi(x)$よりも小である。

この蓋然幸福の喪失が必ずしも賭博の亢奮から受ける快樂よりも大でないのは眞である。すれば吾々は賭博の快樂はベンタムの辭句で言ふ『不純』なものであるとの歸納に投げ返されて了ふ。何故かと言へば、經驗の示す通りこの快樂は焦燥な狂熱的性格を養ひ易く、この性格は着實作業にも一層高級・質實な生活快樂にも不適當だからである。

索　　引

I　件名索引……ローマ字綴による。

II　地人名索引‥‥原語の綴による。

（編・章・節を掲げたものはその所に詳論あり）

I　件名索引

A

アーチァー archer 323
アリアン制度 349

B

米國
　經濟事項上の— 345-6
　－經濟學 376
貧乏
　墮落の原因 4-6, 369
　—は必然か 6-9（第一編第一章二）
微量
　—の二次 275註, 432
文明
　初期—階段と氣候 283-95（第一附錄一）
分業　division of labour
　英蘭に於ける— 330-3
分配 distribution
　平等—（ベンタム）363註
分配理論 173-4
　中心問題 序文 26, 序文 27註
　近代と十九世紀初頭 370-1
分類
　—の原理（ミル）101
　固定的— 133, 136註
分析 analysis 56, 107-8
　—派 59, 377
　數量的— 86
　—上の困難 序文 40, 391-2
　新— 序文 41
　—の發達 374-5
　獨逸學者 380
　—の必要 382
　經濟史家と— 394-400
ブルガー burgher 349-50
物々交換 barter 244
物理學
　—と經濟學 386-7

C

地方化產業 localized industry
　產業地方化を見よ
賃銀 wage
　貨幣— money-wage 48
　實物拂— 147
　英吉利勞働者の— 序文 38
　—法則 368, 368註
貯蓄 save 167
中世
　不正行爲 15
　—都市 22, 313-4（第一附錄七）, 318
　參考—騎士道・教會

中數 mean
—太陽 127註

D

代表的 representative
—的營業 a—firm 序文 35
大規模
—工業制 22, 335
代用 substitution
—原理 序文 38
獨逸
—經濟學 47註, 377-81
—學者の共同行爲尊重 51
—性格と產業 346-8
—系猶太人 348, 381
—社會主義者 381
—經濟學者と動機の廣汎性 410-1
動機
その間接測定—測定を見よ
—の廣汎性（獨逸學者）410-1
—分數（ワーグナー）411-2
利己的— 411
利他的— 411
獨占 monopoly
—と企業の價値 122-3註
奴隸
アリストートル 7
希臘羅馬 21, 300, 303
努力
—と欲望 177
參考—活動
道德 34-5註

E

營業關係 business connection
—の價値 117註
—と國民富 123註

F

フェニキア人 299
フィジオクラット Physiocrats
生產的・不生產的 134註
自然的自由 352-6（第二附錄二）
ケネー 352 註, 353註
爲さしめよ行かしめよ 355註
—とスミス 356, 358
價値と生產費 359-60註
獨逸學者の反對 378-9
資本 418
福利 benefit
未來—割引率 252
參考—福祉・幸福
福祉 wellbeing
一般—と富 176-7
—と所得 279-85（第三編第六章六）, 433-5
參考—福利・幸福
佛蘭西
—と海上發見 320-1
—經濟學 376
—社會主義 376

G

外國貿易
—研究 365-6, 367
蓋然 probable
—的 63
願望 desire
多樣— —for variety 178-80（第三編第二章一）
卓越— —for distinction 179, 180-4
優秀— —for excellence 184-5
シーニオル 179
マカロック 16
—測定 19'-2
參考—欲望
原因結果
因果關係 序文 28
表面的結果 序文 40
直接原因 401
原因の原因の探求 401
限界 marginal
—增量 —increment 序文 29
テューネン 序文 30註
最終的（ジェヴンス）序文 30註
—購入 —purchase 192-3
—利用 利用を見よ
—需要價格 需要を見よ
—價値 274
參考—最終
限界利用 marginal utility 193-4, 269
ウィーザー 193-4註
ウィックスティード 193註
ジェヴンス 194註, 425
ゴッセン 194註
—の測定 197-8, 207, 210-1註
—遞減法則 192, 251註, 269, 273註, 425-6
—度 425, 426
貨幣の— 245, 431-3
原始
—社會 13-4, 146, 290, 295-8
技術工 artisan 8
希臘
—文明 298-302（第一附錄三）
ギルト guild 313
過度の—規約 338註
濠洲
社會制度の發展 346

H

發展
連續觀念 序文 26
最初期—階段の欲望 178, 185-6
平均 average
多數人の— 37-9
產業集合體の各員の— 52
平衡 balance
福利と費用との— 168-9註
需要の限界增量と生產增量 序文 29
變化性 changefulness
經濟狀態の— 10
變則 abnormal
—行爲 序文 24
—的自然發現 序文 34
參考—正常
必要 need
現在— 247-50（第三編第五章三）
未來— 247-50（第三編第五章三）
必要品 necessaries 138-45（第二編第三章三・四）, 238-41
勞働— 136註
生存— 138, 140
能率— 128, 140, 142-3
生活— 138
スミス 139, 140註
フィジオクラット 139-40
カーヴー 140註
最低生存— 140註
マッケー 141註
傳習的— 142
慣例的— 143-5
ステュアート 143註
嚴密— 144註
絕對— 226
保護主義
米國學派 376

法則 law
一般化 generalization 59
物理— 59-63, 76
經濟— 序文 22, 63-74, 76
社會— 65-6
ノイマン 65註
ワーグナー 65註
經濟—と條件 71-4, 76
スミスの條件句省略 73
欲望飽滿— 欲望を見よ
利用遞減— 利用を見よ
收穫遞減— 收穫遞減を見よ
需要— 需要を見よ
因果—と倫理 354, 358註
—の發展 371

I

衣服
—欲 180-2
英蘭
經濟自由 22
—と海上發見 321
—人の性格 321-4
資本主義的農業組織 324-5
自由產業の發達 321-45（第一附錄一〇—一六）
企業家階級 326
宗教改革 326-30（第一附錄一一—一三）
分業 330-3
英吉利經濟學と獨逸經濟學 379, 410-1
伊太利
—經濟學 376

J

地代 rent 序文 25
この用語の範圍 103, 399
定義 152
準— quasi— 152-3, 序文 25
土地— —of land 序文 26
固定貨幣— 394
實效 efficient
—需要 需要を見よ
時運 Conjuncture 257-8
自由
—競爭 競爭を見よ
—企業 free enterprise 24, 25
產業及び企業の— 19-20
經濟—（その項）
個人—と共同— 345
—貿易說（スミス）358-9
ベンタム 362-3
自由競爭（競爭を見よ）
十字軍
—の經濟結果 317註
住居
—欲 182-3
需要 demand
全部— total— 205-6
—法則 206-7
競爭貨物の— 207-9
合成— composite— 208註, 226註
結合— joint— 209註
—の一般性質 209
直接— 219
—科學 243註
—理論 173-7（第三編第一章）
實效 efficient— 182, 197, 225
消費者— 190-211（第三編第三章）
—曲線 200-1註, 203註, 206註, 207註
—點 201註
ミル 201-2註
ケアンズ 201-2註
—增加 203註, 429-30

市場— 203-6
彈力性 第三編第四章
感應性 213, 215
彈力性の測度 213-4註, 4:6-9
全部—曲線 217註
個人—と消費者餘剩 258-64（第三編第六章二）
不變支出— 427-9
需要價格 demand price 195-7（第三編第三章二）
限界— marginal— 196-7
—表 —schedule 198-201, 203註, 208, 208註, 227, 259-64
平均— 261註
競爭貨物 273註
完全な—表 276
需要供給
—一般理論 173-4
—均衡—般理論 序文 26, 序文 27註

K

價値 value
總體收益— 序文 39
現行— current— 序文 24-5
偶然— occasional— 序文 24-5
市場— market— 序文 24-5
正常— normal— 序文 24-5
正常—理論 序文 24
本質— intrinsic— 270註
ハリス 270註
稀少性— scarcity— 272
—と生產費 359-60
—學說（希臘羅馬）21-2
貨幣— money— 117註
交換— exchange— 117註, 125
スミス 125
實質— 127, 141註
—理論 174
交換—決定原因 175
貨幣
—の威力 15
—と勁機測定 27-50（第一編第二章一—五）
—追求 43-7
何故に經濟科學の中心か 45-6
—と國民富 124註
—の實質價値 127
—經濟 money economy 147, 245
—の限界利用 245, 431-3
—の限界價値 274-5
—研究 363-4, 367
貨幣購買力 purchasing power of money 126-7
均一—の假定 127註
—の變化 228
貨幣測度 money measuse
參考—測定
海上發見
—の福利 319-21（第一附錄九）
階級
殘滓— residuum 5
下層— 7-8
—的同情心 48
經濟學と— 52, 368
快樂 pleasure 34註
その測定— 測定を見よ
—主義 Hedonism 33註
—學 Hedonics, 431
追求— 40-1註
未來—の割引 250-4（第三編第五章四）, 430-1
不純な—源泉（ベンタム）431, 435
快適 comforts
—品 138, 238
—及び高雅の程度（スミス）139

價格
—の個人的重要性の差 38-9
正常— 68, 69
市場— market— 71
—時的— temporary— 71
費用— cost— 117註
定義 126
—と利用 第三編第六章
現行— 263
家計
消費者— 238-41, 245-6
家庭經濟 246-7註
官房學
—的 cameralistic 研究 352註
敢爲 enterprise
參考-企業心
環境 257-8
カノニスト Canonist
—學說 317註
慣習
—の起源 40-3 (第一編第二章三)
—と欲望 180-1
初期文明と— 290, 294-5
分割所有と— 295-8 (第一附錄二)
—の利害 344
活動 activity
—と欲望 177, 178-89 (第三編第二章)
參考-努力
家族
—的愛情 48-9
經營收入 earnings of management 序文 27註
定義 151-2
計慮 deliberate
—的 40-3
經濟
—と生活 3-4
—と性格 4
—人 economic man 序文 22-3, 54
—理論と獨逸學者 380
—理論 400
—事實の研究 362, 391, 400, 403
經濟 economies 35
內部— internal— 序文 35
外部— external— 序文 35
一般— general— 序文 35
經濟學
—的研究の基礎 序文 34-6, 序文 38
—のメッカ 序文 36-7
經濟生物學 序文 36-7, 398
經濟動態力學 序文 36-8
定義 3, 84, 85, 99, 173
最高興味 8-9
—の發達 9-10 (第一編第一章三), 23-6, 第二附錄
その取扱ふ生活部面 27-9, 76, 99
—は產業集合體を取扱ふ 52, 204-5
—の取扱ふ人間 序文 38, 54
—の範圍 56, 第三附錄
—の任 57
—的一般化 法則を見よ
實際的手段の教示 71
純粹— 74註
應用— 74註
—的研究の順序と目標 75-96 (第一編第四章)
—の實際的目標 77-9 (第一編第四章二)
—的攻究の主要題目 79-80 (第一編第四章三)
英國—の實際問題 81-5 (第一編第四章四)
—者の所要才幹 85-96 (第一編第四章五・六)
—の精密性 精密を見よ
—非難 93-5
—建設者の性格 94-5
—用語 102-9
—上の概念 106-9 (第二編第一章四)
近代—と古代經濟思想 349-50
近代—と人間 371
—と社會主義 369-70
—と生物學 371-2, 388-90
—の機械 375, 401-2, 407
各國—派 376-82 (第二附錄八)
—と物理學 386-7
—上の抽象推理の用 第四附錄
現實的— 423
經濟學の方法 57—8
比較的方法 366-379
—の發達 375
—と範圍 第三附錄
歸納と演繹 5-9 (第一編第三章一)
演繹推理派 364
演繹的方法 388-9, 406
說明と豫測 389-93 (第三附錄三)
經濟自由 economic freedom 19-20
—の發達 20-3, 第一附錄
北部英蘭 140註
—の利害 338-42
—の制限 343-4
參考-英蘭
經濟史
—研究 379-80
—家の任務 393 400
企業
近代—の基本特色 11-12
自由—の發達 第一附錄
小—制度 336
—家と競爭 339
企業者 Undertaker
英蘭の— 331-2, 334-6
企業收入 earnings of undertaking
經營收入を見よ
機械
—の發明 335-6註
機會 257-8
氣候
—と文明 289-95 (第一附錄一)
均衡 equilibrium
安定— stable— 序文 29
力學的— 序文 36
騎士道
—と貧民 314-6
交易
貴金屬—規制 350-1
幸福 happiness
一般— 176-7
—の貨幣制度 272
總體—と富 280
—增加と所得增加 279-85 (第三編第六章六)
ベルヌーイ 280-1
肉體的— 434
精神的— 434
參考-福利・福祉
工場法
マルティノー 368註
シーニオル 368-9註
マカロック 369註
トゥーク 369註
工場制度 factory system
—の發達 334-6
—の利害 336-41
交換 exchange
—理論 173-4
國民分配分 national dividend
序文 38, 160
功利主義 utilitarianism 33註
組合
—的協同 17, 20

クロニコン・プレチヲスム
倫敦小麥價格 223註
苦痛 pains 34註, 36
參考-快樂
共同 collective
—行爲の動機 50-2（第一編第二章六）
—使用 176
—生產 344
—消費 344
—所有 344
—的自由 345
協同組合 co-operation 388
教會
—と貧民 316-8
曲線 curve
需要— demand— 需要を見よ
全部需要— 217註
不變支出— 427-9
供給 supply
—科學 243註
競爭 12-3, 19
破壞的・建設的 11, 16-9
—貨物の需要 207-9, 273註
企業家と— 339
救貧法 Poor Law 23, 337

M

マーカンティル mercantile
マーカンティリストの不生產的134註
—制度 351
—理論 351-2
滿足 satisfaction 34註, 36, 第三編
—測定 191-2註
全部純— 267註
マルク制度 Mark system 297-8註
未開
—民族 14, 15, 290

N

農業
—上の資本主義 324-6
大陸の—制度 332
—改良 332註
農場
大— 326

O

黃金時代 15-6, 18
和蘭
—と海上發見 320
—經濟學 373
オーストラレーシア
勞働者生活改善 90
墺太利
—經濟學 377

R

ランリグ耕作 Runrig cultivation 298註
ラティフンディア Latifundia 306註
歷史
實驗の缺如 87
—的研究 373
—的科學 373-4
歷史學派
ヘーゲルの功績 303註
—の批評 398
歷史哲學
その影響（ヘーゲル）序文 28
連續性 continuity
經濟科學の發達 序文 21
連續原理 principle of— 序文 23-4
時 序文 25
地代と利子 序文 25-6
人間と要具 序文 26
用語 序文 27-8
發展 序文 28
數理的連續概念（クールノー）序文 28
需要は連續函數 序文 29
經濟進化 序文 33
—の切斷 106
個人需要に—なし 204
利益 advantage
職業— 47-8
純— net— 150
不— disadvantage 150
利潤 profits 190
定義 151, 151-2
—率 152
—法則 368
力學
—的類同性 序文 36-8, 398
靜態—的類同性 序文 36-7
經濟動態— 序文 36
利己心
—と利他心 43-52（第一編第二章四-六）
利率
—決定原因 253註
利子 interest 102
定義 150
ボェーム・バーゼルク 423-4註
連續性 序文 25
資本— 序文27註
利得 gain
全部純— 151
利用 utility
スミス 125
—と欲望 190-1
—遞減法則 192-8
全部— total— 192, 269, 273-4註, 277-8註, 425, 431-2, 433
ロイド 211註
最終— final—（ジェヴンス）194註, 210-1註
最終 度 425
—と價格 第三編第六章
平均— 261註
—增加分 261註
總體—（パッテン）274註
限界— その項
勞働 labour
熟練— 不熟練— 103
生產的— 生產を見よ
定義（ジェヴンス）132, 133-4註, 161, 163
—者家計 239-41
—自由市場 336
—秩序の變化 336-8
—爭議 389
—收入 序文 27註
勞働階級
—家計 238-41, 246註
—能率の減退 340
—研究 362
—と近代經濟學 369
勞働組合
標準規約 89
—なき時代 340
—の政策の變化 341
—主義 388
羅馬
—文明と經濟生活 302-9（第一附錄四）
流行
その變化と消費 230

S

最終 final
　ジェヴンス 序文 30註
　—利用（ジェヴンス）194,註 210-1註
産業
　自由—の發達 第一附錄
産業地方化
　英蘭に於ける— 333-4
産業革命
　現代— 序文 33
産業有機體
　—研究 92-3
サラセン人
　その文明 310
生物學
　人類將來の希望を與ふ 95
　その教訓（ダーウィン）101-2
　その影響（スペンサー）序文 28
　經濟— 序文 36-7
　—的概念 序文 37-8
　—と經濟學 371-2, 388-90
　—の方法 388-90
　—的類同性 398
政治的經濟學 Political Economy 3
正常 normal 序文 24
　—動機 序文 23
　—價値理論 序文 24
　—生產費 序文 35
　—行爲 序文 36
　この用語の相對性 64-74（第一編第三章四）
　—價格 68
　—經濟行爲 68
　—行爲と正當行爲 69-70
　參考—變則
精密 exact
　經濟學の—性 28-9, 52-3, 55, 86, 371, 374
　物理的科學の—性 59-63, 86
　經濟法則の—性 63-4
生產 production
　定義 128-30
　ベーコン 128-9註
　—的 productive 132-8（第二編第三章二）, 135, 141-2註
　マーカンティリスト 134註
　フィジオクラット 134註
　スミス 134-5註, 135
　トウィス 135註
　ミル 135註
　—的消費 136-7, 143, 144
　シーニオル 137-8註
　—理論 174
　—的勞働 422
　參考—財
生產費 cost of production
　正常— 序文 35
　交換價値決定原因（リカード）175
　實質— 359
　—と價値 359-60
生產方法
　迂回的— 169註
セミティック
　—人 301
　—制度 349
社會
　—有機體 384
　—現象の連帶性 384
社會科學
　統合—の不可能 384-5（第三附錄一）
　—の分化 383-5
社會主義
　—的冒險 18-9
　—と宗教改革 327註
　猶太人 348
　—と經濟學 369-70
　佛國— 376
　獨逸— 381
社會組織
　—の變革 344-5
奢侈
　—品 138, 141, 238
　—禁止 180
資本 capital 100, 1 6-69（第二編第四章）
　自由— free— 序文 25
　流動— floating— 序文 25-6
　—の新舊投下 序文 25-6
　營利— trade— 147-8, 413-5
　自由— free— 151
　流動— floating— 151
　純粹— pure—（クラーク）151註
　—財 —goods（クラーク）151註
　消費— consumption— 153-4
　補助— auxiliary— 153-4, 421
　要具 instrumental— 153-4, 421
　流通— circulating—
　固定— fixed—（ミル, スミス, リカード）154-5, 155註
　ジェヴンス 159, 162註
　個人—（スミス）159-60
　—一般 160
　社會的— 159-62（第二編第四章五）, 415-24
　—の生產性 productiveness 166-9（第二編第四章八）, 416, 419-24
　—の期望性 prospectiveness 166-9（第二編第四章八）, 416-9, 423註
　—と富 166-7
　—需要 167
　—一般の福利と費用との平衡 168註
　—の定義 第五附錄
　マルクス 414
　フィジオクラット 418
　スミス 418
　佛國的定義 418, 424註
　英吉利的意味 418
　フィッシャー 418, 422
　ヘルマン 418註
　ワルラス 418-9註
　クニース 419註
　ニコルソン 419註
　營利手段 419
　賃銀— wage— 420
　報償— remuneratory— 420
　リカード 420註
　シーニオル 420-1註
　ミル 421註
　ボェーム・バーヱルク 423-4註
資本主義
　英蘭の— 324-6
　—的企業者制度 334, 336
　—的雇主 342
信用
　—組織と國民富 123-4註
消費 consumption
　定義 130-1
　生產的— 136-7, 143, 144
　—理論 173-7（第三篇第一章）, 187-9
　—統計 176
　—理論上位論 186-7
　バンフィールド 187註
　ジェヴンス 187註
　—者家計 238-41
　—組合 279
　參考—財
消費者地代 consumer's rent
　消費者餘剩を見よ
消費者餘剩 consumer's surplus 257-79, 432
　ニコルソン 264註

エヂウォース 264註
全部— 267註
所得 income 146-69（第二編第四章）
廣義の— 146
貨幣— 147, 158, 165
純— net— 148-9, 162
眞正— true— 148-9, 162
總— gross— 149, 162
名目— nominal— 149
全部純— total net— 156-9
實質— real— 159
社會— social— 155-9（第二編第四章四）162-4（同六）
國民— national— 160, 161, 164, 165-6（第二編第四章七）
土地— 序文 38-9
—增加と福祉增加 279-85（第三編第六章六）, 433-5
所有
分割— 295-8
共同— 297
收益價値 rental value
總體— 序文 39
收穫遞減
—法則 193註
— 傾向 序文 39
收穫遞增 195註
宗教 3-4
基督教 7, 309
—改革 319
英國と—改革 326-30（第一附錄一一・一二）
測度 measure
貨幣— 169註, 408-10
需要彈力性の— 213-4註
未來福利割引率の— 252
幸福の貨幣— 272
勤勞の— 408-10
測定
貨幣による行爲誘因の間接— 27-50（第一編第二章一-五）, 76-7
願望— 191-2
滿足— 191-2註
利用— 限界利用を見よ
動機の— 408-10
數學
—的記號 序文 29
圖形 序文 29
純粹— 序文 30-1
微增量學（微分學）序文 40-1
新分析法 序文 41
數理的方法 175-6, 193註, 209-11註, 406-7
クールノー 209註, 210註, 211
デュプュイ 209註
ゴッセン 209-10註, 211註
ジェヴンス 210註
メンガー 210註
ワルラス 210註
フィッシャー 211註
エヂウォース 211註
パレート 211註
ウィックスティード 211註
バンタレオーニ 211註
アウスピッツ 211註
リーベン 211註
スミス主義 Smithianismus 359, 359註
西班牙
—半島と海上發見 319
ストア主義
—と羅馬法 307-8
フィジオクラット 353-4 註

T

待望 waiting 167
他の事情等し 72
定義
固定的—101-9
土地
定義 160-1
—と資本 166
—耕作の歷史 395
長期—貸借 394, 395
—私有と—共同保有 395
統一性 unity 10, 146註
基本的— 55
統計
消費—の不完全 233-4, 235-41（第三編第四章八）
—的研究 366
富 wealth 99-101
定義 99, 110
個人—の構成分 114-20（章二編第二章二-四）
共同— collective— 119-20（第二編第二章四）, 278
負量の— 114, 121
總— 114
眞正純— 114
廣義の— 117-9（第二編第二章三）
人— personal— 118, 119
外界— external— 119
物質— material— 119
實質— real— 120
國民— national— 120-4
世界— cosmopolitan— 121, 124
資本と— 166-7
—の蓄積 253註
—と幸福 280
—の共同使用 284
社會— 416
蓄積— 418
參考-財
都市
自由— 311-3（第一附錄六）
中世— 313-4（第一附錄七）
—の發滅 318
淘汰
自然—と農業 332
自然—と工業 333
テュートン人
その文明 309-11（費一附錄五）
その封建制度 314-5, 317-8
その性格 351

U

ウズラ usury 102
—と教會 316註

Y

雇主
—と企業者 334-6
資本主義的— 342
餘暇
—の利用 184
餘剩 surplus
—滿足 256, 262, 265
消費者— 257-79
—享樂 263
欲望 wants
未來— 133
現在— 133
—とその滿足 第三編
—の多樣性 177, 178
リカードの輕視 177, 210註
—と慣習 180-1
—と活動 178-88（第三編第二章）
—の分類（ヘルマン）188註
ベンタム188註

バンフィールド 188註
ジェヴンス 188註
シーニオル 188註
ハーン 188-9 註
メンガー 189註
テューネン 189註
一飽滿法則 192, 210註
—と利用 190-1
彈力性 第三編第四章
參考-願望
ヨーマン yeoman 323註
猶太人
社會主義 348
參考-セミティック人
遊離 isolate 序文 37

Z

財 goods
定義 110
物質— material— 110-7, 119-20
人— personal— 110, 111
非物質— immaterial— 110, 111, 116
內界— internal— 111, 112註, 116
外界— external— 111, 112註, 147
ヘルマン 112
可讓— transferable— 112, 116-7註
不可讓— non-transferable— 112
—の分類表 113註
自由— free— 113-4, 121
經濟— economic— 116, 118
共同— collective— 119-20 (第二編第二章四)
消費者— consumer's— 131
消費— consumption— 131
一次— —of the first order (メンガー) 131, 131-2註
二次— 132註
生產者— producer's— 131
生產— production— 131
要具— instrumental— 131, 422
中間— intermediate— 131
財產
私有一權の根據 96, 381
一權の法律的基礎 124
初期文明階段の一權 295-8
羅馬一法 307-8
私有 制度とベンタム 363註

II 地人名索引

A

Anderson アンダーソン
經濟事實の研究 356
Argyll, Duke of アーガイル
ランリグ耕作 298註
Aristotle アリトスートル
奴隸制度 6
外界的自然 291註
職業 301註
機習 403
Arkwright アークライト
織機 335註
Ashley, W. J. アシュレー 序文 42
カノニスト學說 317註
經濟史の研究 393註
Athens アセンズ (アテネ)
人民自治 312
Attica アティカ
隔社 21
Auspitz アウスピッツ 211註

B

Bacon ベーコン
人間の對自然加工力 128-9註
Bacon ベーコン
クールノーの譯著 211註
Bagehot バヂォット
用語の用法 104, 105註, 418
慣習と產業 294註
リカード論 364註
その業績 373
Bakewell ベークウェル
農業改良 332註
Banfield バンフィールド
消費理論上位論 186, 187註
欲望理論 168註
Barbon, Nicholas バーボン
その業績 353註
價値と生產費 360註
Barone バローネ
貨幣の限界利用 275註
Bastiat バスティア
自然的社會組織 370註
Bentham ベンタム
その追隨者の『苦痛・快樂』 34註
欲望分析 188註
その感化 362-3
—とミル 372註
快樂源泉の不純 431, 435
Bernoulli, Daniel ベルヌーイ
所得增加と滿足增加 280-2, 433, 434
Berry ベリー 序文 42
Bigg, Heather ビッグ
流行 220註
Blanc, Louis ルイ・ブラン
その暗示 376
Blanqui ブランキ
羅馬產業 306註
Böhm-Bawerk, E. von ボェーム・バーヱルク
資本定義 423-4註
Boston ボストン
糖蜜公稱輸入高 234註
Brindley ブリンドリー
運河 335註
Brown, W. A. ブラウン
古代產業 306註
Bruges ブリュージュ

人民自治 312
Backle バックル
外界的自然 291註

C

Cairnes ケアンズ
定義 105-6註
需要 201-2註
奴隷力 305註
その業績 373
Cannan キャナン 序文 42
スミス論 357註
—とヘルド 421註
Cantillon カンティヨン
勞働者家計 240註
經濟學の系統的研究 352-3註
價値と生產費 360註
Carey ケリー
米國學派 376
—とリスト 378註
Carlyle カーライル
經濟學非難 93
安價なその模倣者 405
Cartwright カートライト
織機 335註
Carver カーヴァー
必要品 140註
Clapham クラプハム
發明 336註
Clark, J. B. クラーク
純粹資本と資本財 151註
需要彈力性 226註
Colbert コルベア
交易規制 351
Comte コント
—と社會主義 370
有機的發達 372
統合社會科學 383-4
排外的專門の害 384-5
Cort コート
製鐵改良 335註
Cournot クールノー
數理的連續概念 序文 28
增加量 序文 29
數理的方法 序文 30
均一構買力標準の假定 127註
數學用語の一般採用 209註
欲望 210註
ベーコン譯 211註
その業績 376
Cramer クレーマー
富の增加と快樂增加 434
Crompton クロムプトン
織機 335註
Cunningham カニンガム
スミス論 357註

D

Darwin ダーウィン
生物習性 101-2
種の起源 102註
Davenant ダヴナント
人間は最貴重財產 118註
Delonme ドローム
羅馬貨幣 306註
de Nemours, Dupont ド・ヌムール
フィジオクラティー 354註
Draper ドレーパー
テュートン人の業績 310註
Dupuit デュプュイ
價格による快樂測定 209註

E

Eden イーデン

勞働者家計蒐集 240註
貧民史 362
事實の研究 336
Edgeworth エヂウォース 序文 42, 211註
數理的心性學 36註
消費者餘剩 264註
貨幣の限界利用 275註
Engel エンゲル
家計表 238-9註

F

Fay, C. R. フェイ 序文 42
Fisher フィッシャー
數理經濟學書目 211註
資本定義 418, 422
Florence フローレンス
人民自治 312
Foley フォリー
流行 230註
Flux, A. W. フラックス 序文 42
Fourier フーリエ
その暗示 376
Friedländer フリードレンダー
羅馬習俗史 305註

G

Galton ゴルトン
人種活力の維持 293註
Giffen, Sir R. ギッフェン
パンの騰貴と勞働者家計 275
Goethe ゲーテ
有機的發達 372
Godwin ゴドウィン
—とマルサス 370註
Gossen ゴッセン
限界利用 194註
價格による快樂測定 209-10註
獨創性 211註
Green, T. H. グリーン
倫理學序說 34註
Gross グロス
ギルド 313註, 338註
Grote グロート
希臘史 300註

H

Hargreaves ハーグリーヴズ
織機 335註
Harris ハリス
物一般の評價 270註
價値と生產費 360註
Harrison ハリソン
家計 240註
Hasbach ハスバッハ
スミス研究 357註
Haverfield ヘーヴァーフィールド 序文 42
Hearn ハーン
欲望理論 188-9註
Hegel ヘーゲル
歷史哲學 序文 28
外界的自然 291註
希臘性情と羅馬性情 302註
ストア派 308-9
テュートン性情 309-10註
宗教改革 327註
有機的發達 372
Held ヘルド
英國の資本主義 336註
資本概念 421註
Hermann ヘルマン
內界財・外界財 112註
欲望分類 168註

分析 380
經濟動機論 411
資本定義 418, 418註
Hewins ヒューインス
カノニスト學說 317註
Higgs ヒッグス
カンティヨンの地位 353註
Hirst ハースト
ケリーとリスト 378註
Hobbes ホッブス
價値と生產費 360註
Hume, D. ヒューム
スミス論 361註
勞働者團結權 365註
比較研究 366
Hutchson ハチソン
—とスミス 357註

I

Ingram イングラム
羅馬產業 306註
教會 317註
ミルについて 373註

J

Jevons, W. S. ジェヴンス
勞働定義 132, 133註
資本 159
消費理論上位論 187註
欲望理論 188-9註
最終 序文 30
最終利用 194 註, 210-1註, 425
利用測定 210-1註
小賣商人帳簿 236
豫想快樂 254註
カンティヨンについて 353註
その業績 373
資本定義 418
交換理論 426

K

Kautz カウツ
經濟學史 303註
カンティヨンについて 353註
Keynes ケーンズ 序文 41
King, Gregory キング
價格評定 222註
Knies クニース
外界的自然 291註
ロッシァーについて 305註
各國發展の同時代化 347註
スミス論 359註
ケリーとリスト 378註
快樂 411
資本定義 419註

L

Laplace ラプラース
肉體的精神的幸福 434
Lauderdale, Lord ローダーデール
需要法則 222註
Leicester レスター
小麥價格 223註
Le Play ル・プレー
勞働者家計研究 240-1註
Leslie, Cliffe レスリー
貨幣愛 45註
歷史的研究 373
Lieben リーベン 211註
Liebenam リーベナム
羅馬自由勞働 306註
List リスト
先進國民の教訓 347註
その天才 377-8
--とケリー 378註
愛國感情 377, 379
Lloyd, W. F. ロイド
利用學說 211註
Locke ロック
その學風 353註
博愛 355註
價値と生產費 360註

M

Mackay マッケー
必要品 141註
Mahan マハン大佐
戰略と戰術 396
Maine メイン
慣習と產業 294註
Malthus マルサス
收穫遞減傾向 序文39
家計 240註
人口研究 362
ゴドウィンによる暗示 370註
資本定義 420註
Marshall, A マーシァル
貨幣信用商業 序文 23-4
產業經濟學 序文 27
產業と交易 序文 33, 序文 35, 20 註
經濟學原理舊版 20
經濟科學課程創始案 91註
ミルの價値理論 203註
倫敦統計協會雜誌上の論文 229-30註
Marshall, M. P. マーシァル夫人 序文 42
產業經濟學 序文 27
Martineau マルティノー
工場法反對 368-9註
Marx, K. マルクス
社會主義 381
資本主義 414
McCulloch マカロック
人の進步的本性 186
統計的研究 366
工場法 369註
その取扱つた事實 374
Menger, Carl メンガー
一次財・二次財… 131-2註
欲望研究 189註
利用測定 210註
Mill, James ミル
ジォン・ミルの教育 372註
Mill, J. S. ミル
科學的分類 101
論理學 101註
『生產的』135註
資本分類 155註
需要 201-2註
—と社會主義 370
有機的發達 372, 372註, 373
—とベンタム 372註
—とリカード 372註
—とコント 385, 385註
演繹法 386註
演繹と歸納 376註, 391
經濟動機論 410-1
資本定義 421註
Mommsen モムゼン
宗教 303註
羅馬の交易 305註
Montesquieu モンテスキュー
外界的自然 291註
寒冷な氣候 293註
比較研究 366
Morris モリス
安價なその模倣者 405

N

Napoleon ナポレオン
　對一戰爭 24
Neumann ノイマン
　自然法則と經濟法則 65註
Neumann イノマン
　希臘地理 300註
Nicholson ニコルソン
　基本的統一性 序文 27
　消費者餘剩 264註
　貨幣の限界價値 275註
　スミスとリカード 361註
　資本 419註
North, Sir Dudley ノース
　自由貿易 354
Norwich ノルウィッチ
　兒童の長時間使用 340

P

Pantaleoni パンタレオーニ
　純粹經濟學 211註
Pareto パレート 211註
　資本定義 418
Partsch パーチュ
　希臘地理 300註
Patten パッテン
　全部利用の計算 274註
Petty, W. ペティー
　家計 240註
　價値と生産費 360註
　事實の研究 366
Pigou ピグー 序文 42
　利用の說 192註
Plato プラトー
　職業 300-1註
Porter ポーター
　統計的研究 366
Price, L. L. プライス 序文 41
　アダム・スミス論 357註
Proudhon プルードーン
　その暗示 376

Q

Quesnay ケネー
　經濟科學形成 352
　自然法則 353註

R

Ricardo, D. リカード
　收穫遞減傾向 序文 39
　自由企業 14
　業績の範圍 24
　固定資本・流通資本 155註
　生産費過重視 175
　欲望輕視 177, 210註
　ニコルソン 361註
　演繹推理 364, 364-5註
　勞働者團結 365註
　單純性の害 367-9
　賃銀法則 368, 368註
　勞働者の立場 368
　利潤法則 368
　—とミル 372註
　—と獨逸學者 377, 379
　生物學的類同 398
　資本定義 420註
Rockingham ロッキンガム
　—內閣の糖蜜課稅 234註
Roeback ローバック
　熔鐵法改良 335註
Rogers ローヂァース
　中世の土地と資本 325註
Roscher ロッツァー
　基礎 序文 34
　ヘーゲルについて 303註
　古代問題と近代問題 304註
Rousseau ルーソー
　自然的生活 354註
Ruskin ラスキン
　經濟學非難 93
　安價なその模倣者 405

S

Sanger サンガー
　バローネについて 275註
Say セイ
　その業績 376
Schmoller シュモラー
　國民經濟學の任務 57, 58註
　古代商業會社 306註
　歸納と演繹 390
Seligman セリグマン
　ロイドの講義 211註
Senior シーニオル
　時 130
　消費と使用 131註
　生産的 137-8註
　卓越願望 179
　欲望理論 188註
　工場法反對 368-9註
　資本定義 420-1註
Sidgwick シヂウィック 序文 42
Smiles スマイルス
　フランダース人 329註
Smith, A. アダム・スミス
　條件句省略 73
　人富の定義 118
　價値の二義 125
　生産的勞働 134-5註
　不生産的勞働 135
　快適・高雅程度 139
　必要品 140註
　固定資本・流通資本 155註
　所得と資本 159-60
　その時代の風習 180
　企業者 332註
　—とロック 355註
　その天才 356-61（第二附錄三）
　—上位論 357註
　その同時代者 356, 362
　—とハチソン 357註
　個人利益 359註
　—主義 359, 359註
　事實の研究 361註
　ニコルソンの說 361註
　その後繼者 362
　外國貿易理論 365
　比較的研究 366
　獨逸經濟學者 377, 378
　資本 418, 419註, 420
Spencer, Herbert スペンサー
　生物學 序文 28
　生活と作業 282-3
　慣習と産業 294註
　統合的社會科學 383
St Chrisostom 聖クリソストム
　商業 316註
Steuart, James ステュアート
　自然的必要品・政治的必要品 143註
　經濟理論 356
St Simon サン・シモン
　その暗示 376
Syme サイム
　快樂 411

T

Taussig タウシッグ 序文 42

Thames テームズ河 63
自由財としての—も富 121
Thünen, von テューネン
増加量 序文 29
限界的 序文 30
欲望研究 189註
Tooke トゥーク
統計的研究 366
工場法 369註
Toynbee トインビー
その業績 373
Turgot テュールゴー
資本定義 418
Twiss, Travers トゥイス
政治的經濟學の進歩 135註

V

Vauban ヴォウバン
人民福祉 355註

W

Wagner ワーグナー
法則 65註
時運 258註
アダム・スミス上位論 357註
經濟學と法律學 380註
經濟動機分類 411
資本定義 421-2註
Walras ワルラス
利用測定 210註
資本定義 4 8, 418-9註
Watt ワット 142註
蒸氣汽罐 335註
Wedgwood ウェッヂウッド
陶器業改善 335註
Westcott ウェストコット
宗教改革 327註
Wicksteed ウィックスティード 211註
限界利用 192註
Wieser ウィーザー
限界利用 193-4註

Y

Young, Arthur ヤング
家計 240註
經濟事實の研究 356, 362, 366
比較研究 366

第一版第一刷　大正十五年六月十五日印刷
大正十五年六月十八日發行

經濟學原理（分冊一）
定價參圓五拾錢

版權所有

譯者　大塚金之助
發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
（振替東京八四〇二番）
（電話銀座四五五八番）

株式會社　秀英舍印刷

マーシヤル著
大塚金之助譯

經濟學原理

（分冊三）

第五編　需要・供給・價値の一般關係

第一章　開題—市場について　**第二章**　需要供給の一時的均衡　**第三章**　正常需要供給の均衡　**第四章**　資力の投下と振當　**第五章**　正常需要供給の均衡　續論長期短期について　**第六章**　結合需要・合成需要—結合供給と合成供給　**第七章**　結合生産物の直接費と全部費用—販賣物—危險保險—再生産費　**第八章**　限界費用と價値の關係—一般原理　**第九章**　限界費用と價値の關係—一般原理續論　**第十章**　限外費用と農業價値の關係　**第十一章**　限外費用と都會價値の關係　**第十二章**　正常需要供給の均衡—續論收穫遞增の傾向との關係　**第十三章**　正常需要供給變動の理論と極大滿足說との關係　**第十四章**　獨古理論　**第十五章**　需要供給均衡一般理論の要點

附錄

第六附錄　物々交換　**第七附錄**　地方稅の歸著　**第八附錄**　收穫遞增の場合に靜態的假定を用ふる限度　**第九附錄**　リカードの價値理論

數學附錄—註解一二—二三

（定價參圓五十錢送料二十六錢）

（分冊四）

第六編　國民所得の分配

第一章　分配序論　**第二章**　分配序論續論　**第三章**　勞働收入　**第四章**　勞働收入續論　**第五章**　勞働收入續論　**第六章**　資本利子　**第七章**　資本及企業の利潤　**第八章**　資本及企業の利潤續論　**第九章**　土地地代　**第十章**　土地耕作制　**第十一章**　分配總論　**第十二章**　經濟進步の一般影響　**第十三章**　進步と生活程度との關係

附錄　**第十附錄**　賃銀基金論　**第十一附錄**　餘剩の若干種

數學附錄—註解二四　件名　地人名索引

（定價參圓七十錢送料二十八錢）

終